「諸法実相抄」講義

大衆のなかで展開された仏教運動

「諸法実相抄」を拝するにあたり、仏教史上の一つのエピソードを申し上げたい。それは、いまから千数百年前、全中国に仏法研学の大きな潮流を巻き起こした、亀茲国の羅什の話であります。

鳩摩羅什は、ご承知のとおり、不朽の名訳といわれる「妙法蓮華経」を訳出した訳経僧でありますが、私が羅什にうたれるゆえんは、一生をかけて中国に渡り、仏教の真髄を伝えようとした情熱であります。波乱の艱難のすえ、中国の長安へ入ったのは、五十歳を過ぎていたといわれています。そして彼のめざしつづけてきた戦いは、そのときから始まったのであります。それまで、力をためにためていたかのように、怒濤のような勢いで翻訳事業が始まりました。中国の僧侶も、羅什の長安入りを伝え聞いて、続々と彼のもとに結集し、歴史にのこる翻訳をなしていったのであります。

羅什入滅まで、八年間とも十二年間ともいわれますが、その間、三百数十巻もの経典が翻訳されて

おり、一か月二巻ないし三巻という驚異的なペースであったことが推察されます。それは、翻訳という言葉からうけるイメージとは異なった、生きいきとした仏教研学運動であったことを象徴しております。

羅什が訳したさまざまな経典の序によると、その翻訳の場には、あるときは八百人、あるときは二千人というように、数多くの俊英が集まっております。その聴衆を前に、羅什は経典を手に取り、講義形式で進めていったのであります。そして、なぜそう訳すのか、その経文の元意はどこにあるのかを話し、あるときには質疑応答のような形式をとりつつ、納得のいくまで解読していったのであります。

書斎に閉じこもり、辞書と首っ引きで、自分一人で何十年もかかって難解な訳業をするのではなく、大衆の呼吸をじかに感じながら、対話の場で仏法を展開していった羅什であったからこそ、あれほどの名訳が生まれたのではないかと思うのであります。

羅什の訳はひじょうになめらかで、かつ経典の元意をふまえた意訳に優れたものがあったというのも、このことを考えれば、なるほどと思われます。仏法は、それがいかに優れたものであっても、難解であれば、人々から離れたものになってしまう。人々と語り、生活のなかで実感するなかに、思想の光は輝いていくものであります。

もし、この羅什教団ともいうべき人々の仏典流布の活躍がなければ、後の天台、伝教の昇華へと、仏法の歴史が展開することはなかったにちがいない。それを考えると、いかにその使命が偉大であっ

たかがわかるのであります。

私はいま、この羅什の業績をうんぬんしようとするものではありません。大衆のなかに入り、大衆とともに語り合ったその姿に、仏法研学の真実の姿があると訴えたいのであります。また、ある意味で私たちも、現代における羅什の立場にあるといえましょう。昔の羅什は、ヨコにインドから中国へと経典を翻訳しました。現代の羅什は、タテに、またヨコにと、七百年前の不滅の末法の御本仏の御金言を、現代という時代に、生きいきと蘇らせる使命を担っております。

すなわち、私どもの教学運動もまた、羅什と同じ方式にのっとり、御書を手にし、講義形式をとり、あるときは質疑応答の形式をとり、あるときは個人指導のさいに、人々の呼吸を直接実感しながら、対話の場で仏法を展開していくのであります。

仏教の創始者たる釈尊も、その生涯は庶民の哀歓のひだにふれつつ、人生の苦との対決のなかから、珠玉のごとき教えが遺されていったことを知るべきであります。

ある仏教学者によると「釈尊は仏教を説かなかった」という極端な説もあるぐらいであります。もちろん釈尊が仏教を説いたのは当然でありますが、この一見矛盾する言葉も、ある意味で含蓄に富んだ言葉であるといってよい。八万法蔵といい、五時八教ときくと、精密に体系だてた教理を思い浮かべ、釈尊もそのカリキュラムにそって、説法したかのように受け取りがちであります。しかし釈尊の説法は、貧苦にあえぐ庶民への激励であり、病に苦しむ老婆を背に負わんばかりの同苦の言葉であり、精神の悩みの深淵に沈む青年へのあたたかな激励の教えであった。差別に悩み、カースト制度に

苦しむ大衆の側に立った火のような言々句々が、その一生の教化を終えてみれば、八万法蔵として残っていたということでありましょう。それは、経文が徹底して問答形式で説かれていることに、象徴的にあらわれている。庶民との対話、行動のなかに釈尊の悟りの法門がほとばしりでていったのであり、それが経典としてまとめられていったのであります。

日蓮大聖人も、また同じ立場を貫かれております。いつも申し上げていることでもあり、また昭和五十一年十月の本部総会でも述べましたので、詳しくはお話いたしませんが、あの膨大な御書も、生涯、激動の日々のなか、民衆一人ひとりとの対話をつづけられ、朝に夕に救済の手をさしのべられた結晶であります。大聖人は、けっして書斎に閉じこもって御書をおしたためになったのではありません。戦いながら書き語り、書き語られながら戦われたのであります。

仏教ときけば、山野にこもり、静的なものと考えがちでありますが、その発生からすでに実践のなかに生き、民衆のなかで生きいきと語り継がれてきたのが、その正統な流れであることに刮目したいのであります。

信行学の要諦を教示

さて「諸法実相抄」は、日蓮大聖人みずから、この御抄の追伸のところに「ことに此の文には大事の事ども記しるしてまいらせ候ぞ」、また「此の文あひかまへて秘し給へ、日蓮が已証の法門等かきつけ

て候ぞ」と明記されておりますように、比較的短い御述作ではありますが、仏法の肝要がことごとく集約してあらわされております。

執筆せられた文永十年五月といえば、法本尊開顕の書であり、受持即観心の、末法仏道修行の要諦を示された「観心本尊抄」を著された翌月であります。本尊抄が、文永十年の四月二十五日、本抄が翌五月十七日と記されております。

したがって内容も、法華経迹門、在世衆生得脱のカギとされた、方便品の「諸法実相、十如是」の文から説き起こされて、法華経哲理の真髄を示し、その当体が妙法蓮華経、即、御本尊であることを教えられております。これは、法本尊の意義を明かされたと考えられます。

ついで、この法華経の極理を明らかにし、かつ弘めるべき人こそ、地涌の菩薩の上首上行であることを示され、それを、まさに日蓮大聖人御自身が実践してきたと述べられるのであります。すなわち、一往、外用の辺からいえば、法華経弘通の上行菩薩の再誕であり、再往、内証の辺からいえば、末法救済の大法を建立する御本仏であり、久遠元初の仏であることを、暗示されているわけであります。これは、人本尊を明かされたと考えてよい。

このように、人法両面から、末法一切衆生の尊敬すべき根本を明かされたことは、人本尊開顕の書たる「開目抄」、法本尊開顕の書たる「観心本尊抄」の結論が、ともに、この一書のなかに包含されていると、私には拝せられるのであります。

しかも、後半においては、未来広宣流布のまちがいないことを予言され、末法万年にわたる仏道修

行の要諦として、信行学のあり方を教示されて結ばれている。すなわち末法の仏法の正体が、その甚深の法体、修行のすべてを網羅して、しかも簡潔にあらわされているのが本抄なのであります。

ゆえに、日蓮大聖人の原点にかえることを根本精神とするわが創価学会は、数ある御書のなかでも、とくにこの「諸法実相抄」を根幹として、自己の信心の研鑽と、あらゆる指導、活動に取り組んできたのであります。

初代会長牧口常三郎先生も、つねに本抄をとおして指導されたとうかがっております。第二代会長戸田城聖先生が、法華経は別にして、まず、私たち数人に講義された御書は「諸法実相抄」でありました。私もまた、この講義を受講した一人であります。

さらに、高等部に対し、また本部職員の代表に対し、私はいくたびか、この「諸法実相抄」を講義してきましたが、拝するたびに、法門の深さに驚嘆し、大聖人の烈々たる気迫に胸をうたれる思いがいたします。

創価学会創立四十六周年を記念して、再び私は、いままで何回となく講義したものに、新時代に相応して加筆添削をして掲載させていただくことにいたしました。

以上、前置きとして申し上げておきます。

いっさいの現象は妙法の姿

問うて云く法華経の第一方便品に云く「諸法実相乃至本末究竟等」云云、此の経文の意如何

「諸法実相」の文は、法華経迹門の肝要であり、天台仏法においては一代仏教の要とし、一念三千法門の依処としたものであります。

本抄をいただいた最蓮房日浄は、もと天台宗の学僧といわれております。おそらく天台家における肝要の法門として「諸法実相」については知っていたのでありましょう。しかし、天台の理の法門では十分に理解することができず、大聖人に、その深い元意をうかがおうとして、質問したものと思われます。

答えて云く下地獄より上仏界までの十界の依正の当体・悉く一法ものこさず妙法蓮華経のすがたなりと云ふ経文なり

難解な「諸法実相」の意義を、明快にズバリと答えられております。

〝諸法〟とは、この現実世界のなかに、さまざまな姿をとってあらわれているいっさいの現象といってよい。〝実相〟とは、文字どおり実の相であります。

「諸法実相」とは〝諸法〟がそのままで〝実相〟であるということで、したがって、大宇宙の千変万化の姿が、すべて、妙法蓮華経のあらわす姿であるということになります。

換言すれば、地獄界という世界すなわち依報も、地獄界に住する衆生つまり正報も、その生命の究極のすがたは妙法蓮華経である。餓鬼界の依報ならびに正報も、妙法蓮華経である。畜生界も、修羅界も、さらに菩薩、仏もみな同じである。これが「諸法実相」の意味するところなのであります。

また、諸法の実相とは、諸法のなかに実相が含まれるのでもなく、逆に実相のなかに諸法がつつまれるものでもないのです。さらには、諸法の奥底にあって、万象を統一する実体を立てるのでもないのです。

たとえば、西洋の哲学や仏法以外の宗教では、諸法の奥底に、諸法を離れて、真理や実体、本質を求めてきた。キリスト教の場合、宇宙森羅万象を統一する根源の実体を「唯一絶対神」と立て、諸法から遠く離れたかなたに、究極の真理をおいたのであります。その結果、神と人間、神と万象とのあいだに断絶が生じ、そのあいだにあって仲介する人間の権力や教会の力が大きくなり、ついに民衆を隷属させることとなったことは周知の事実であります。

これに対して、仏法の偉大性は、現実そのものに即して、真理を見いだすところにある。あくまで、現実の一個の人間や事物を徹底的に凝視して、そこに真実を発見するのであります。それゆえ、諸法実相は、森羅万象の個々の事物や人間に即して、その実相を洞察していく哲理なのであります。

諸法に即して実相、実相に即して諸法、という相即の関係にあるのが、諸法実相という哲理の不可

欠な観点であります。この関係を見誤ると、諸法実相はわかりません。

さて、大宇宙のいっさいの現象、つまり太陽や月が昇り、また地平のかなたに沈みゆくのも、大海の潮が満ち干するのも、木々が風に揺れ動くのも、その真実ありのままのすがたは、仏法の眼でみていくならば、ことごとく妙法蓮華経の所作なのであります。

この「諸法実相」の説法を爾前経と相対して申し上げれば、「諸法」という現象面だけにとらわれ、差別観に陥ったのが爾前経でありました。この諸法つまり差別相が、その究極においてそのまま共通の妙法という実相であることを明かしたのが、法華経の「諸法実相」であります。

ここに「行布を存する爾前権教」と「円融の法華経」との相違がある。このことはまた、一切衆生が差別なく成仏しうるという、仏法の平等大慧の法理に通ずるのであります。

しかし、この法華経迹門の、ただ平等普遍の実相を知っただけでは、いまだ〃理〃であります。法理を知り、これを実践化したのが、本門の〃事〃の法門なのです。

これを理解するために、一つの考え方として、ニュートンの万有引力の法則を例にとってみたい。万有引力の法則は、物理学の法則であり、そのまま結びつけて考えることはできませんが、宇宙を貫く一つの原理であることにちがいはない。ニュートンが発見するといなとにかかわらず、万有引力の法則はあり、それに従って万物は運動している。太陽や月、星の運行も、潮の干満も、リンゴが木から落ちるのも、物理学の眼でみるならば、いっさいが万有引力の法則に従っているのであります。法則を知らない人から見れば、たんにリンゴが熟れて地面に落ちたとしか見えないとしても、物理学の

眼から見るならば、その実相は、地球という物体とリンゴという物体の間に働く力関係であると映ったのでありましょう。

この法則は、それを知っている人にも、知らない人にも、平等に働いているものでありますが、すべてに働いているというだけであっては、まだ〝理〟にすぎない。万有引力の法則を知らないで、大空を飛ぼうとしても、落ちるだけであります。また、それを知ったとしても、知っただけにとどまれば、それもまだ理の段階であります。その法則を知って活用するところに、飛行機や宇宙ロケットのような価値創造が生まれてくる。これを〝事〟といってもよいでありましょう。

仏法の眼からみるならば、宇宙のいっさいの運行の、その真実の相は妙法蓮華経であります。凡夫の眼には、本々が揺れ動いているのみであっても、仏の眼には、妙法の妙なる旋律であり、太陽の輝きも、生命をはぐくむ妙法の働きの一分であります。

したがって、私ども一人ひとりの生命も、いっさい妙法によって構成され、妙法のリズムに従って活動しているといってよい。ただし、そのことのみにとどまればまだ理であり、それを知らず、妙法に冥合することを知らない人は、あたかも万有引力の法則を知らずに空を飛ぼうとして落ちる人のごとく、不幸から不幸へと、暗きから暗きへとおもむくのみでありましょう。

また、たとえ諸法実相の哲理を知ったとしても、たんなる観照の哲学に終われば、それも理の範疇にとどまる。

それを希望の方向へと向け、価値創造し、幸福へと蘇生させていく方法として、日蓮大聖人は御本

尊を顕されたのであります。すなわち、諸法は実相であるとの法理を、日蓮大聖人の魂魄をとどめて御本尊という当体のうえに具現化されたのであります。それは、もはや諸法実相という法理ではない。日蓮大聖人の御本仏の生命それ自体の諸法実相であります。御本尊を「事の一念三千」と申し上げるゆえんは、ここにあるのであります。

ゆえに、諸法実相とは、一往は、諸法は、そのまま妙法蓮華経という真実のすがたであるという観照の哲学のようでありますが、再往、文底観心のうえからいえば、御本尊こそ諸法実相という大宇宙の縮図であり、大聖人の仏法においては、諸法実相とは即御本尊の異名なのであります。

妙法の一法において依報も正報も連続

依報あるならば必ず正報住すべし、釈に云く「依報正報・常に妙経を宣ぶ」等云云

「依報あるならば必ず正報住すべし」とは、すこし疑問に思うところであります。それは、私どもは法華経の教えによって、正報が根本で、それに応じて依報があると理解しているからであります。したがって「正報住するならば依報あるべし」といわれるべきところのように思える。

この点についてかんたんに申し上げると、仏法においては、とくに爾前経では一貫して、十界は、

十種の異なる世界として説かれてまいりました。十界という言葉自体、十種の世界という意味であります。

これについては、ご承知のように、たとえば地獄界は地の下一千由旬のところにあるとされた。また、餓鬼界は地の下五百由旬、畜生界は水・陸・空といわれる。修羅は海のほとり、海の底とされ、人は大地によって住し、天は宮殿といいますが、須弥山の山腹から頂上、さらにその上方の空というふうに考えられております。

以上の六道のほか、いわゆる四聖についても、二乗は方便土、菩薩は実報土、仏は寂光土と、それぞれ、別々の世界に住すると説かれてきたのであります。

このように、種々の依報が説かれるということは、当然そこに住する衆生も、種々に異なるということです。しょせん、住する衆生すなわち正報と、それぞれの国土すなわち依報とが一体になっているのが、生命の真実のあり方であります。すなわち、爾前経においては、十界とは世界観であった。法華経において初めて、依正不二の生命観としてとらえられたのであります。

「釈に云く」とあるのは、妙楽大師の法華文句記のことですが「依報正報・常に妙経を宣ぶ」とは、この十種の依報、正報の生命は、いずれも妙法蓮華経をあらわしている、ということであります。

すなわち仏法においては、依報、正報ともにその奥深いところでは断絶がないと教えている。依報が妙法蓮華経の当体であるとともに、正報もまた妙法蓮華経の当体なのであります。妙法蓮華経の一法において、依報も正報も連続しているのであります。

あえていえば、妙法の根源の一法が、一方において正報とあらわれ、それと同時に依報となってあらわれているということであります。すなわち生命という次元において、依報も正報も結合しているのであります。ゆえに、ここから正報の生命の変革が、依報の変革に通ずるという仏法の卓越(たくえつ)した原理が生まれてくるのであります。

この依報、正報ということに関連して、理解の参考のために澤瀉久敬(おもだかひさゆき)博士の論文を紹介しておきたい。それは環境と生物との関連についてふれたものであります。博士はこう述べておられます。

「ひとはともすれば一定不変の環境を考えそこへすべての生物は置かれていると考える。しかし人間には人間の環境があり、魚には魚の、また鳥には鳥の環境がある。そうして、人間各自にとって環境はそれぞれ異なるようにすべての生物には各自の環境がある。一言にして言えば環境は無数である。生物を離れて環境自体というようなものはどこにもない。生物が生物として次第に自己を生み出してゆくように、そうしてそれによってさまざまな生物がそれぞれ自己の形を明らかにしてくるように、環境もまた次第に生物から分離して環境となるとともに、それぞれの生物に対応するさまざまな環境として自己を示してくるのである」

博士はこのように、生物と環境とが対応していることを述べ、さらに、この対応した両者の根源をたずねれば、同じ「原始存在」という一つのものに帰着すると主張しておられます。これは生物の世界への鋭い観察から結論づけられた真理でありますが、仏法で説く依正不二の原理の一つの証言であるとも考えられるのであります。

仏は架空の抽象的存在ではない

又云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如十如は必ず十界十界は必ず身土」

同じく妙楽大師の金錍論の文であります。一念三千の構成について述べたものといえます。

実相は、すでに述べたように常住の本体――妙法蓮華経であり、これは一念三千の〝一念〟ということができます。「実相は必ず諸法」とは、この妙法蓮華経、常住の一念は、かならず万法としてあらわれてくるということであります。

つぎに「諸法は必ず十如十如は必ず十界十界は必ず身土」の文は、諸法、森羅万象の真実の相、すなわち実相を、十如、十界、身土に分析して述べたものであります。

まず、十如は諸法、万象の共通面をあらわしています。いかなる法といえども、かならず十如是という十の側面をもっているということであります。

十如是とは、相、性、体、力、作、因、縁、果、報、本末究竟等です。

この十如是をともなって顕現する森羅万象、諸法は、またかならず、地獄界から仏界にいたる十界の範疇におさめることができる。

これは、諸法を差別面からとらえたものであります。

たとえば、地獄界にも十如是がそなわっていれば、仏界にも十如是がそなわっている。このように、十界のいかなる界であろうと、すべて十如是がそなわっているというのが、諸法に即する真実のすがた、すなわち実相なのであります。

さらに「十界は必ず身土」――これは、十界のそれぞれの世界は、かならず、身（正報）と土（依報）のうえにあらわれるということです。つまり、依正不二の原理をあらわしております。

以上のことを具体的に申し上げれば、たとえば、私たちの生命を考えた場合、その真実の相は妙法蓮華経の当体でありますが、それは私たちの、日々生きているこの命を離れてあるものではない。朝起き、昼働き、夜眠る。その「諸法」のなかに「実相」はあるのであります。妙法は幽霊のようなものではなく、実在するものであります。「実相は必ず諸法」なのであります。

また「諸法は必ず十如」についていえば、瞬間瞬間、動いている生命には、十如是がそなわっているということであります。生命といっても、如是相のない生命はない。このなかにも「私には如是相はありません」という人はいないはずであります。かならず顔があり、形がある。また如是性もある。石のように、存在しているだけということはない。いな、石でさえも如是性はある。如是体についても同じであります。

また、如是力、作、因、縁、果、報、すべてをそなえております。だれびとにも、その人でなければもっていない「力」がある。そして、それを周囲に及ぼしていく「作用」ももっているのであります。

自己のなかにある「因」、外界との関係である「縁」、そして、それらがもたらす生命内在の「果」、外界にあらわれる「報」と、いっさいを私たちはもっております。さらに、最初の相から終わりの報にいたるまで、一貫して等しい生命活動を展開している。これが本末究竟して等しいということであります。

したがって、実相といっても、諸法、また十如をそなえていなければ、実相ではなく虚相といわざるをえない。たとえば、爾前経で説かれている仏にしても、大日如来などは、十如是がありません。だいいち如是相がない。いまだかつて、大日如来にお目にかかった方は、だれ一人いないはずです。相、性、体をそなえていない仏に、衆生を救う力や作用もあるわけがない。これはキリスト教のゴッドやイスラム教のアラーにしても同じであります。

本来、それらは、形あるものとしてあらわれるべきではないという考え方に立っているのでありましょうが、諸法や十如のない実相はないというのが、法華経の主張であります。

釈尊にしても実在の人物であるし、日蓮大聖人は、現実社会の真っただ中で、人々の苦しみを分かちながら戦われ、御自身の悟りの境界を、全人類に本末究竟して等しく与えていこうとされた御本仏であります。

仏とは、また実相とは、けっして架空の抽象存在ではなく、諸法、十如を厳然とそなえるものであるということを強調しておきます。

「十如は必ず十界」――十如といっても、私たちの苦しみや喜びといった境涯と、けっして無縁のも

のではないということであります。かならず十界のいずれかにあらわれてくる。逆にいえば、地獄界にも仏界にも、十如はあるということであります。いままでは御本尊を知らず、苦しみの因、縁、果、報であった。そしてその人の生命も地獄の力、作であった。当然、その相、性、体は地獄でありましょう。喜びに満ちみちているのに、顔だけは恐ろしい形相で、ということもないし、悲しくてしようがないのに、顔だけは大口をあけて笑っている、などという手品みたいなことはできません。そのように本末究竟して地獄にいた人が、御本尊をたもって、幸福へ、喜びの人生へと変わっていく。因、縁、果、報も、如是力、如是作も、相、性、体も、ぜんぶ仏界に近づいていくのであります。

ですから、如是相も福々しくなって、如是性も優しくゆうゆうとした境涯になっていき、家庭をしっかりと支えていく如是力、如是作となり、因、縁、果、報が、幸福へ幸福へと転回していく。どうか、そういう十如是の人生になっていってください。

そして最後に「十界は必ず身土」、その十界は、わが身とわが土にかならずあらわれるということであります。地獄界の生命であれば、その身もその土も地獄界である。逆に、仏界の人の身も土も、仏界となっていく。そこに人間革命の意義がある。御本尊を持っているのに、家庭はめちゃくちゃ、隣近所のことも関係なし、というのでは「十界は必ず身土」にならない。皆さん方一人ひとりが、わが家を笑いさざめく金の城のごとくに築き、地域社会に清水のごとき潤いをもたらしていくとき、大きくは世界という土を仏国にしていくことが可能でありましょう。またそうなっていただきたい。それが「十界は必ず身土」ということであります。

さらに、日蓮大聖人の文底仏法から、この文を読むとき、三大秘法の御本尊それ自体をあらわしているのであります。

諸法とは、これまで述べてきたように、十界三千の諸法です。それが大御本尊にそのまま実相として縮図されているのであります。

すなわち、十界三千の諸法が、南無妙法蓮華経の一法に具足した姿、これが御本尊の相貌であり、諸法実相なのです。具体的にいえば、中央の「南無妙法蓮華経 日蓮」が、十界三千の諸法の実相です。左右の十界は、大聖人己心の十界であり、南無妙法蓮華経の光明に照らされた十界の生命活動をあらわしています。

まず、左右両側の上のほうに釈迦牟尼仏と多宝如来とありますが、これは仏界をあらわし、同時に、御本仏の脇士となっております。その両わきには、上行、無辺行、浄行、安立行の四菩薩がしたためられていますが、これは菩薩界をあらわしている。それから、舎利弗、迦葉等は縁覚界と声聞界、大梵天王、帝釈天王、大日天王、大月天王、第六天の魔王等は天界、転輪聖王等は人界、阿修羅王等は修羅界、竜女等は畜生界、そして鬼子母神、十羅刹女等は餓鬼界、最後に提婆達多等は地獄界です。これらの十界の諸法に「必ず十如」を具していることはいうまでもありません。

さて、その十界が「必ず身土」とは、もったいなくも御本尊という一つの草木の掛け軸（身）になり、御本尊がましますところ、たとえば仏壇などは〝土〟にあたると考えられます。

又云く「阿鼻の依正は全く極聖の自心に処し、毘盧の身土は凡下の一念を逾えず」云云

同じく金錍論の文であります。

無間地獄といっても、その世界も衆生もまったく「極聖」――仏の自心、本然の生命のなかにある。逆に「毘盧」すなわち仏の尊極の生命もまた、身、土ともに、凡夫の一念の外にあるものではない。

十界互具の原理を、地獄界と仏界を代表として示したものであります。「極聖の自心」も妙法蓮華経であり、「凡下の一念」も妙法蓮華経であるがゆえに、仏の生命に無間地獄もそなわり、凡夫の一念に仏の生命が具足する、と拝すべきでありましょう。

釈迦、多宝も妙法の力用の表現

此等の釈義分明なり誰か疑網を生ぜんや、されば法界のすがた妙法蓮華経の五字にかはる事なし、釈迦多宝の二仏と云うも妙法等の五字より用の利益を施し給ふ時・事相に二仏と顕れて宝塔の中にして・うなづき合い給ふ

以上の妙楽大師の言葉の意味するところは明確であり、疑問をさしはさむ余地はない。したがって「諸法実相」の意義は、十法界の姿が妙法蓮華経であるということを明かしたところに存するのである、とのおおせであります。

法華経は、この真理を、あるいは法説し、あるいは譬喩説し、あるいは因縁によって説いて、在世の声聞の弟子たちを得脱せしめたのち、滅後の未来のため、多宝の塔が湧現し、虚空会の壮大な儀式が展開されていきます。「釈迦多宝の二仏と云うも」うんぬんの文は、この本門の虚空会において、多宝塔中に釈迦、多宝の二仏が並座しますが、そこにあらわされたものも、しょせんは妙法蓮華経にほかならないということであります。

この御文は、ひじょうに深い含蓄のある表現になっています。一つは、釈迦、多宝の二仏といっても、妙法蓮華経の一法が衆生を利益するその働きを、具体的な仏という形によってあらわしたのであるということです。これはこのあとにでてくる「仏は用の三身にして迹仏なり」に対応するもので、経文に説かれる荘厳な仏も、結局は、大宇宙に遍満する仏界という妙法蓮華経の働きを表現したものであるということです。

したがって、仏と同じく、十界すべて、妙法蓮華経のあらわす生命の働きであるというのが、ここにおおせの元意なのであります。

もう一つは「宝塔の中にして（釈迦、多宝の二仏が）うなづき合い給ふ」とあるように、虚空会の儀式によって、釈迦、多宝の二仏が説きあらわした法とは、妙法蓮華経であるということです。釈迦が

説き、多宝が合意し証明したことを「うなづき合い給ふ」とおおせられています。

こうした宝塔の儀式がなにをあらわしたものであるかについて、戸田先生はつぎのように講義をしています。

「釈迦は宝塔の儀式を以て、己心の十界互具一念三千を表しているのである。日蓮大聖人は、同じく宝塔の儀式を借りて、寿量文底下種の法門を一幅の御本尊として建立されたのである。されば御本尊は釈迦仏の宝塔の儀式を借りてこそ居れ、大聖人己心の十界互具一念三千――本仏の御生命である。この御本尊は御本仏の永遠の生命を御図顕遊ばされたので、末法唯一無二の即身成仏の大御本尊であらせられる」と。

末法の御本仏を宣言

かくの如き等の法門・日蓮を除きては申し出す人一人もあるべからず、天台・妙楽・伝教等は心には知り給へども言に出し給ふまではなし・胸の中にしてくらし給へり、其れも道理なり、付属なきが故に・時のいまだ・いたらざる故に・仏の久遠の弟子にあらざる故に、地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩より外は、末法の始の五百年に出現して法体の妙法蓮華経の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕すべき人なし、是れ

迹門方便品の諸法実相も、本門の虚空会の儀式も妙法蓮華経をあらわしているのであるということは、いまだかつて、だれもいったことがない。日蓮大聖人が、初めて述べられるのである、ということです。

しかし、そこに法華経の元意があったがゆえに、天台、妙楽、伝教等の、法華経をほんとうに読みきった人々は、内心では知っていたことは当然です。したがって「天台・妙楽・伝教等は心には知り給へども言に出し給ふまではなし・胸の中にしてくらし給へり」といわれているのです。

では、なぜ天台、妙楽、伝教等は、心のなかでは知りながら、言葉にだしていわなかったか。言葉にだしていわなかったということは、人々に教えることをしなかったわけです。それをしなかった理由として、大聖人はここで三つあげられている。

一つは「付属なきが故」です。付嘱とは、仏から使命を託されることであります。法華経の会座において、釈尊は、法華経の肝心の法門を弘通する使命を、本化地涌の菩薩に託した。ところが天台、妙楽、伝教等は、その本地は迹化の菩薩である。ゆえに、その使命を受けていない、ということであります。

第二は「時のいまだ・いたらざる故」であります。この法華経の肝心の法門が弘通されるべき時は、薬王品にも「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して」とあるように、第五の五百

歳、末法の時代であります。

〝時〟とは、端的にいうならば、客観的条件のもっとも深い底流をなすものであります。委細に三世を知る仏にしてはじめて、この正しい時を知ることができるがゆえに、仏は明確にこの妙法を弘めるべき時を定めたといえましょう。だが、天台、妙楽、伝教等の出現した時代は、五の五百歳の区分のなかでは、第四の五百歳であった。したがって、これらの人々は、法華経の肝心たる妙法を、言葉にだし、人に教えることをしなかったのであります。

第三は「仏の久遠の弟子にあらざる故」であります。仏の久遠の弟子ということは、師弟不二の原理からいって、仏と同じ心、等しい悟りの境地にあるということであります。経文にあらわれた地涌の菩薩は、この久遠元初の仏の弟子が、妙法流布のため、その付嘱のため、垂迹して現じた姿であります。

仏の悟りの極理である妙法を説き、弘めるためには、みずからその悟りを得、仏と等しい境地にもともと住している人でなくてはならない。妙法を説き弘めることは「如来の使いとして、如来の事を行ずる」ことになるのであります。

広宣流布の付嘱は地涌の菩薩に

これに関連して一言、本化の菩薩と迹化の菩薩の関係について述べておきたい。

本化とは、いうまでもなく地涌の菩薩であります。この地涌の菩薩の住処について、法華経には「大地の下の空中」と説き、天台はそこを「法性の淵底玄宗の極地」と表現しておりますが、日蓮大聖人は、さらに明確に「南無妙法蓮華経」であると示されております。すなわち、南無妙法蓮華経をわが生命と覚知し、南無妙法蓮華経の流布を自己の使命とし、本分としているのが地涌の菩薩であります。

これに対して、迹化の菩薩とは、文殊、弥勒、薬王、普賢、観音、妙音等の諸菩薩であります。これらの菩薩たちは、社会の動向を察知する力で人々に利益をもたらし、妙なる音楽で心を喜ばし、慈愛の心をもって人々に尽くし、医学の力をもって病苦を除く等、その特性をぞんぶんに発揮して、人人のために働く菩薩たちであります。

ゆえに世間においても、真に慈悲の精神に立って、おのおのの社会的立場にあって、またその能力を発揮して人々のため、社会のために尽くす人は、迹化の菩薩の一分にあたるといってよいでありましょう。しかしながら、南無妙法蓮華経という法体を弘めることによって、人々のために尽くしている人は、世間にはどこにもおりません。

なぜかならば、この仏法の流布こそ、地涌の菩薩の本分であるからであります。釈尊が法華経において、迹化の菩薩たちが滅後の弘経を誓うその誓いを「止みね善男子」と一言のもとに止めて、わざわざ地涌の菩薩を召しいだし、付嘱をなしたわけも、この一点にあります。南無妙法蓮華経という根源の一法をもって、人々のため、社会のために尽くしていくことができるのは、本化地涌の菩薩のみ

であり、またそれこそ、末法の根本の実践なのであります。

したがって、私たちは、あくまでも南無妙法蓮華経に生きぬくことを本分とし、その流布をみずからの〝この世の使命〟と定めたうえに、社会のあらゆる分野において活躍していくならば、その活動は迹化と同じようであっても、その根本は総じての地涌の菩薩であります。

だが、反対に南無妙法蓮華経の根本を忘れてしまったならば、迹化の菩薩にとどまることすらできず、自己の才能や名声に酔い、日々の生活におぼれて、三悪道、四悪趣の境界におちていくことでありましょう。

ゆえに深く探求していけば、広宣流布に励む同志は、あるいは一学生であれ、一主婦であれ、一学者であれ、一サラリーマンであれ、みな地涌の菩薩の眷属が、それぞれの世界へと勇躍出現した姿であります。

たんに、一主婦が、一学生が、たまたまその悩みを解決するために信仰しているという自覚しかなければ、それはまだ一歩浅いところを彷徨している段階であるといわざるをえない。

われわれの奥底の一念――それは、地涌の菩薩の使命に立って、御本尊と、日蓮正宗創価学会と、広宣流布とにおくべきであると、申し上げておきたいのであります。

さて、天台、妙楽、伝教等が以上の三つの条件を欠くゆえに、法華経の肝心の法を説き弘めることができなかったのに対し、一往、地涌の菩薩として、再往、無作三身の仏としての日蓮大聖人が、それをなすことができるというのが、つぎの文であります。

「地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩」という文は、さきの「付属なきが故」に対応しておおせです。と同時に、この地涌の菩薩について涌出品で「我久遠より来かた是等の衆を教化す」と示されている元意に照らすならば、「仏の久遠の弟子にあらざる故」にも対応していることは明らかでありましょう。

また「末法の始の五百年に出現して」とは、「時のいまだ・いたらざる故」の文に対応していることも、いうまでもありません。日蓮大聖人のお振る舞いは、さきに示した三つの条件がすべて満たされたうえのことである、とおおせなのであります。

「本門の本尊」御図顕に出世の本懐

「法体の妙法蓮華経の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕すべき人なし」――この御文のなかに、本門の題目と本門の本尊を示されております。

「法体の妙法蓮華経を弘め給う」が、本門の題目を弘通されていることであります。「宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕す」は、本門の御本尊を建立されることであります。

もし、大聖人が、たんに「南無妙法蓮華経」の題目流布のみをもって、本懐とされたとするならば「妙法蓮華経の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕す」とはいわれなかったでありましょう。

むしろ「宝塔の中の二仏並座の儀式」すなわち御本尊を顕されたところにこそ、日蓮大聖人の出世の御本意があったことは、この文に明確にうかがわれるのであります。

ともあれ、この題目、御本尊をあらわし弘めることは、地涌の菩薩の上首上行等にしかできないことである。そのゆえは、これが本門寿量品の事の一念三千の法門だからであるとおおせです。迹化の菩薩は迹門の法門は弘めることができる。しかし、本門寿量品の事の一念三千は、本化の菩薩でなければならないのです。

迹門の法は迹化の人、本門の法は本化の人でなくてはならないのであります。

この「地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩」とは、日蓮大聖人御自身のことであり、人本尊をあらわします。また「本門寿量品の事の一念三千」とは、法本尊のことであり、人法一箇をあらわしております。

大聖人につらなる私どももまた、もともと末法の独一本門の南無妙法蓮華経に徹する使命をもって生まれてきたのであります。

ともかく釈尊も天台も伝教も、すべて帰着するところは妙法の大地であり、それら先人の出現はすべて日蓮大聖人の御出現の序曲であった。いにしえの先人たちが、生涯を賭けて求めぬいた一法が御本尊なのであります。

私どもは、いま大聖人の世界最高の太陽の哲理をもっている。ともあれ、光輝あるこの世の使命への自覚を新たにしたいのであります。

「神通之力」とは御本尊の働き

されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ、経に云く「如来秘密神通之力」是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし

妙法蓮華経すなわち南無妙法蓮華経が、仏の生命の常住不滅の体であり、釈迦、多宝の二仏といっても、この南無妙法蓮華経という体があらわす働きにほかならない、とのおおせであります。

体は〝本体〟、用は〝働き〟であります。まさしく御本尊のお姿であります。御本尊における釈迦、多宝は「南無妙法蓮華経　日蓮」と中央におしたための脇士となっており、妙法の用の仏として位置づけられております。釈迦、多宝といえども、またあらゆる十方三世の諸仏といえども、妙法の働きであります。

南無妙法蓮華経とは、日蓮大聖人の御生命そのものであり、ゆえに大聖人は、十方三世の諸仏を動かしていく当体であられる。私どもも御本尊を受持することによって、あらゆる仏、菩薩を動かしていくことができるのです。なんと私どもには、偉大な境涯の海が開けていることでありましょうか。

ほんとうの信力、行力を貫いていけば、当体義抄文段に「我等、妙法信受の力用に依って即蓮祖大聖人と顕るるなり」とあるごとく、大聖人の生命が渾々とわいてくるのであります。

また本とは「本地」で、本来の境地をいい、迹は「垂迹」で、影として映った姿をいいます。

これを、もう少しわかりやすくいうと、本迹について天台大師は、天月と池月をもって示しております。空に輝いているほんものの月が〝本〟で、池の水面に映った月影が〝迹〟であるというのであります。

考えてみると、影は、池だけに映るわけではない。海の水面にも映りますし、湯飲みの茶の面にも映ります。ガラスの面にも映ります。すなわち、十分に光を反射するなめらかな面であれば、そこにはっきりとした影を映すことができるのであります。こうした光を十分に反射する面は、現代的にいえば、スクリーンと呼ぶことができます。

したがって、法華経本門において、仏の本地を久遠実成と明かしたということは、久遠五百塵点劫成道の仏身が本地で、それ以前の始成正覚の釈尊は、当時のインド社会というスクリーンに映った影となるのであります。さらに、地涌の菩薩が、本地・久遠元初の自受用報身如来であるということは、久遠元初の仏が、法華経の儀式というスクリーンのうえに映した一つの影ということになるのであります。

地涌の菩薩ばかりでなく、釈迦、多宝の二仏も、久遠元初の自受用報身即南無妙法蓮華経という本地の仏が、虚空会の儀式のうえに映し、あらわした影である、とのおおせであります。

これを、立場は違いますが私どもの生命に約していえば（約すとは、立場からという意義）、私どもはさまざまな社会をスクリーンとして、さまざまな姿＝影を映しております。家庭というスクリーンでは、一家の長という姿、会社というスクリーンでは、たとえば課長、学会の組織というスクリーンでは大ブロック長、国際社会というスクリーンでは日本人という影、そして生物の世界をスクリーンとしては、一個の人間という影を映しているといえる。

これらは〝影〟であるゆえに、スクリーンが揺れれば、影も揺れる。スクリーンはそのままでも、やがて消える影もあります。学生という影は、卒業によって消えるのであります。

では、消えないで、永続していく本体はいかなるものか。人間の過ちの根本は、かりにあらわれているにすぎない影を、みずからの不変の体であるかのごとく錯覚してしまうところにあるといっても過言ではないでしょう。さきにあげたうち、人間であるということは、比較的根本に近いし、生き、行動していくうえで忘れてはならない原点であります。

だが、それすら、より深く考えれば、生死流転する無常の存在にすぎない。ゆえに、この生老病死という流転、変貌の人間存在をみつめ、生死を超えて常住の自己の真実の姿を見いだそうとしたのが、仏教なのであります。そして、結論的にいえば、南無妙法蓮華経こそ、真の常住不滅の体であり、それが自己はもとより宇宙万物の実相であると究め尽くしたのであります。

ゆえに、妙法蓮華経こそ〝本仏〟、それに対して、釈迦、多宝の二仏は〝用の仏〟〝迹仏〟であるとおおせられるのであります。

つぎに「経に云く」と、寿量品の文をあげられております。「如来秘密」の「神通之力」で、「如来秘密」が体の三身をあらわし、これは本仏にあたる。「神通之力」は用の三身をあらわし、迹仏である、と。

いずれについても〝三身〟ということをいわれるのは、もとより、天台の「一身即三身なるを名けて秘と為し、三身即一身なるを名けて密と為す」との釈をうけておられるからであります。

この経文を文底から読めば、如来とは南無妙法蓮華経如来のことであり、秘密とは内緒にしておくということではなく、「三大秘法抄」に説かれているごとく、寿量文底の大御本尊そのものであります。神通之力とは、この南無妙法蓮華経如来、即御本尊の働きであります。

「神通之力」を用の三身とすることについても、天台の文句につぎのようにあります。

「神通之力とは三身の用なり。神は是れ天然不動の理、即ち法性身なり。通は無塞不思議の慧、即ち報身なり。力は是れ幹用自在、即ち応身なり」――すなわち〝神〟は法身、〝通〟は報身、〝力〟は応身で、用の三身となるのであります。

「凡夫こそ本仏」と断言

凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり、然れば釈迦仏は我れ等衆生

のためには主師親の三徳を備へ給うと思ひしに、さにては候はず返って仏に三徳をかふらせ奉るは凡夫なり

凡夫があくまでも「本仏」である。これに対して、釈迦仏をはじめ、経文に説かれるあらゆる仏は、妙法蓮華経の働きとしての「迹仏」にすぎない、ということであります。法華経の道理からいえば当然のことでありますが、それをこのように明確にいいきり、凡夫こそ本仏なりと断ぜられたところに、日蓮大聖人の教えが、末法万年の未来に投じた、不滅の力用と光明があるのであります。

ここに、凡夫とおおせられたのは、別して日蓮大聖人の御事であり、日蓮大聖人が御本仏であられることを示されております。

「御義口伝」に「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、……仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり」(御書全集七六六ページ)とあるとおりであります。

ともに、総じて私どもは、当然、凡夫であります。その凡夫が、もっとも尊く、偉大であることを、日蓮大聖人が、みずから凡夫の姿を示してお説きくださっているのであります。

あくまでも、日蓮大聖人の仏法は、人間が中心であります。

「御義口伝」上の方便品「唯以一大事因縁の事」に、法華文句を引用して「衆生に此の機有って仏を感ず故に名けて因と為す、仏機を承けて而も応ず故に名けて縁となす」(御書全集七一六ページ)とおおせのごとく、大聖人の御出現自体、苦悩の衆生があったればこそであります。

御本尊の威光勢力、福徳も、迷える凡夫がいたればこそであります。また、その偉大な仏法を流布していくのも、社会の荒波にもまれながら戦う勇気ある人々がいるからこそできるのであります。

過去のあらゆる宗教において、究極的に尊厳であるとされたのは、神であり、超人格者としての仏でありました。人間の尊さは、この神の恩寵と、仏の慈愛につつまれているという条件のもとに、はじめて認められるものであったのです。

ゆえに、過去の宗教のほとんどは、神あるいは仏に直接仕える人々を特権的存在とし、世俗の人間、一般庶民を卑しい存在としたのであります。さらに、世俗の人々についても権力者は特別の恩寵をうけるとして、王権神授説のもとに、階級構造に宗教的権威を付し、これを固定化する結果となりました。

したがって、いずれの社会においても、民主化の過程は、即、宗教否定、宗教の無力化の過程であったのであります。

しかしながら、宗教の喪失、信仰の消滅がもたらしたものは、人間精神の不安定であり、人間的信頼の絆の弱体化でもあった。このため、再び宗教的信仰の復活が心ある識者によって叫ばれはじめているのが、二十世紀後半の現代の状況でもあります。

だが、過去の宗教を復興することが、問題の解決につながるものでないことは、この歴史の推移をみれば明らかであります。

人間自身を妙法の当体として、いかなる人も尊厳なる仏になることができるとする、日蓮大聖人の

仏法こそ、人類の求めはじめている問題に、真っ向から答えた大宗教なのであります。

西欧において、ある近代思想家は「神が人間をつくった」という聖書の教えに反対し、「人間が神をつくったのだ」と叫んだときます。いま日蓮大聖人が「釈迦仏がわれら凡夫のために主師親三徳をそなえていると思っていたらそうではない。仏に三徳をこうむらせたのは、われわれ人間なのである」と断言されているのは、さらに近代的であり、革新的思想というべきではないでしょうか。

この一事をもってしても、日蓮大聖人の仏法が、人間不平等の基盤となった過去のあらゆる宗教と一線を画する、未来永久に人類が根本としていくべき偉大な宗教であることを、強く信じきっていただきたいのであります。

迷いを悟りに転ずるのは「信」

其の故は如来と云うは天台の釈に「如来とは十方三世の諸仏・二仏・三仏・本仏・迹仏の通号なり」と判じ給へり、此の釈に本仏と云うは凡夫なり迹仏と云ふは仏なり、然れども迷悟の不同にして生仏・異なるに依って俱体・俱用の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり

天台大師の法華文句の文をあげておられます。寿量品の「如来寿量」の〝如来〟を釈したもので、

この如来とは、十方三世の諸仏、二仏、三仏、本仏、迹仏の通号である、と。二仏とは、真仏と応仏で、真仏とは、ありのままの仏、応仏とは、衆生救済のために応現した仏ということであります。三仏とは、法身、報身、応身の仏ということです。

如来とは、仏という意味であり、哲学的にいえば「如如として来る」ということで、瞬間瞬間の生命を、如来ともいい、仏ともいうのであります。

この生きている、瞬間瞬間の生命――それは、仏像でも絵像でもない。大宇宙の生命の律動を一点に凝縮させつつ、現に発動している生命そのもの、これが如来なのであります。

南無妙法蓮華経如来とは、南無妙法蓮華経という元初の大生命を、瞬間瞬間に湧現している仏のことであります。

如来とは、一般的にいって、仏の通号であり、それは、なにも釈尊一人ではない。経文には、迦葉仏、阿閦仏等、たくさんの仏がでてきます。だが、別しては、久遠元初の自受用身如来のことをいうのであります。

さて、ここでこの釈を引かれた元意は、本仏、迹仏という点にあります。

「此の釈に本仏と云うは凡夫なり迹仏と云ふは仏なり」とおおせのように、凡夫が本仏であり、経文に説かれた仏は迹仏にすぎない、というのであります。

いま、この本仏、迹仏ということを、寿量品に即して考えれば、このように大聖人がいわれた意味は、おのずから明らかであります。

すなわち、寿量品では、釈尊が、インドに応誕してはじめて成道した、いわゆる始成正覚の仏ではなく、じつは久遠五百塵点劫の昔に成道したのであると明かします。そして、この久遠成道の仏を「本仏」とすることは、ごぞんじのとおりであります。

してみると、釈尊は、インドに応誕して、三十にして成道する以前、すなわち凡夫であったときも、仏であったことはまちがいない。むしろ、三十で成道したという仏としての姿こそ、かりに示した〝迹〟の仏といわなければならない。さらに、寿量文底の意でいえば、五百塵点劫で成道した仏というのも〝迹〟の仏であります。

「御義口伝」の「第一南無妙法蓮華経如来寿量品第十六の事」に「惣じて伏惑を以て寿量品の極とせず唯凡夫の当体本有の儘を此の品の極理と心得可きなり、無作の三身の所作は何物ぞと云う時南無妙法蓮華経なり」(御書全集七五二ページ)とありますごとく、凡夫の当体、本有のままで、南無妙法蓮華経如来であられるのが、御本仏であられます。

ゆえに「本仏と云うは凡夫なり迹仏と云ふは仏なり」とおおせなのであります。

しかしながら、同じく凡夫といっても、衆生と仏とのあいだには、厳然として相違がある。それは、悟っているのと迷っているのとの違いである。「悟るを仏、迷うを凡夫」ということであります。もうすこし厳密にいえば、悟っている凡夫が仏であり、迷っている凡夫が衆生ということになります。

日蓮大聖人は、御自身、南無妙法蓮華経の当体であられることを悟られている。私どもは迷いの凡夫であります。

この「迷い」を「悟り」へと転ずるものは何か、それは「信」の一字であります。

「俱体・俱用の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり」とは、さきの御文に「凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり」とあったのと関連しております。

迷っている凡夫は、自身がじつは仏であると知らないために、経文等に説かれている仏がほんとうの仏だと思いこんでいる。したがって、凡夫が総じての体の三身の仏であり、「俱体・俱用の三身」であるということを知らないのであります。

この「俱体・俱用」ということでありますが、これは、体とともにかならず働きがあり、働きとともに体があるということであります。

仏法でいう「体」とは、「体」だけであるものではなく、かならず「用」をともなっているのであります。「用」を取り払って「体」だけ取り出すことはできないのであります。

たとえば、池田大作という「体」は、池田大作という所作にしかあらわれないし、またその所作は、ぜんぶ池田大作という「体」の表現なのであります。

南無妙法蓮華経という「体」は、森羅三千の「用」をともなっております。

ゆえに、私どもが、南無妙法蓮華経という大生命をば、わが胸中に顕現していくならば、いっさいを動かし、いっさいを働かせていくことができるのであります。

この俱体・俱用の「体」とは、諸法実相の「実相」ということであり、「用」とは「諸法」にあたります。

一切の衆生が妙法の当体

さてこそ諸法と十界を挙げて実相とは説かれて候へ、実相と云うは妙法蓮華経の異名なり・諸法は妙法蓮華経と云う事なり

したがって、凡夫の当体がそのまま妙法蓮華経であることを明らかにするために、諸法という言葉によって十界を示し、その諸法、すなわち十界の依正の当体が、そのまま実相であると説かれたのであるということであります。そして、実相とは妙法蓮華経の異名でありますから、諸法すなわち十界の依正の当体、ことごとく一法ものこさず妙法蓮華経のすがたなりということになるのであります。

地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相なり、餓鬼と変ぜば地獄の実のすがたには非ず、仏は仏のすがた凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが妙法蓮華経の当体なりと云ふ事を諸法実相とは申すなり

地獄は地獄のすがたそのままが実の相、実相であります。餓鬼と変じたならば、もはや地獄の実のすがたではない。仏は仏のすがた、凡夫は凡夫のすがた等々、万法の当体そのままのすがたが実相であり、妙法蓮華経であるということを「諸法実相」というのであります。

これは、過去の仏法観を根底から打ち破るものといわなければならない。従来、仏教の思想は、仏や菩薩、あるいは二乗のみを尊しとして、他の衆生、とくに地獄、餓鬼、畜生にいたっては、卑しむべきもの、忌むべきものとしているように理解されてきました。そのあらわれが、餓鬼や畜生の名称が人を蔑んで呼ぶ名や、罵る場合に使われてきたという事実であります。

もっと現実的、社会的場面でいえば、貧窮し、みじめな生活を余儀なくされている人々を卑しみ、忌みきらう、冷酷な風潮を生みだしてきたことも否定できません。

法華経の「諸法実相」の原理は、これを真っ向から打ち砕いて、地獄、餓鬼、畜生等の衆生も、仏、菩薩も、等しく妙法の当体であり、平等に尊極の存在であると説いたのであります。

さらに、仏法の真髄は、地獄、餓鬼、畜生等の九界の生命をいかにすれば、尊極の存在とすることができるかという方途も説いているのであります。御本尊におしたための九界の衆生は、ことごとく妙法の光に照らされて、本有の尊形となっております。

この御本尊と私どもの生命が境智冥合すれば、仏界所具の地獄界、仏界所具の餓鬼界として、ゆうゆうと九界の生命を自在に操縦していくことができるのであります。

当然、悲しみも、苦しみも、欲望もある。それでありながら、それは仏界という大海の上にわき立

つ波として、最高の人間らしい生活をいろどる働きとなってくるのであります。

ゆえに「諸法実相」を事実のうえで明言できるのは、御本尊を建立された日蓮大聖人の仏法にして、はじめてできうることなのであります。

実相の究極は南無妙法蓮華経

天台云く「実相の深理本有の妙法蓮華経」と云云、此の釈の意は実相の名言は迹門に主づけ本有の妙法蓮華経と云うは本門の上の法門なり、此の釈能く能く心中に案じさせ給へ候へ

迹門方便品に「実相」の名で示されたものの本体は、本門寿量品にあらわれた妙法蓮華経にほかならないということを、天台の釈をあげて裏づけられたところであります。

「此の釈能く能く心中に案じさせ給へ候へ」とおおせのように、これは法華経の根本義にかかわる深い法門であります。というのは、天台は明確にはいっておりませんが、この釈を大聖人の観心のうえで読めば、実相の究極はなにかといえば、寿量文底の南無妙法蓮華経を示しているからであります。

一往、法華経の経文の流れをみますと、法華経は、一切衆生の成仏のカギとなる、三世諸仏の悟りの法を明かそうとしたのであります。方便品のはじめに「諸仏智慧甚深無量」とあるのがそれであ

り、方便品に示されたその法の内容が「諸法実相・十如是」だったのであります。

ゆえに、声聞の弟子のなかでも智慧第一と称せられた舎利弗は、ただこの「諸法実相」の説法で得脱し、他の中根、下根の声聞たちも、その後の譬喩説、因縁説によって、つぎつぎと得脱したわけであります。

この在世の弟子、声聞たちに対する説法のあと、法師品、宝塔品以下は、仏滅後の未来に妙法蓮華経をだれが弘めるかと釈尊が呼びかけ、それにこたえて、迹化の菩薩たちが名乗りでる、しかしこれを釈尊は断り、大地から本化の菩薩を召しいだして、この地涌の菩薩に法を付嘱する、という流れで展開されます。

したがって、法師品、宝塔品以下は、文のうえからみますと、滅後弘通の人を定めることを目的として展開されたことは明らかであります。しかしながら、ただそれだけではない。再往これをみれば、そこには、滅後弘通の法体そのものが明かされている。これが「本有の妙法蓮華経」であります。

在世の声聞の弟子たちは、過去に下種・結縁がありますから、すなわち本已有善のゆえに、法華経の会座では「諸法実相」の説法、ないし「三車火宅の譬」、あるいは三千塵点劫の結縁の説法を聞いただけで、種子を覚知することができたのであります。

これは、一つのたとえでいえば、かつて歩いたことのある道で、記憶が定かでなく、迷っている場合に似ています。大部分は思いだせるが、一つだけ曲がり角がどこだったかわからない場合、その一

か所だけ教えてもらえば、あとは迷わずに目的地へ行けるのです。舎利弗が「諸法実相」だけで得脱できたのは、これと同じようなものと考えてよいでしょう。

ところが、未来とくに末法の衆生は、過去に下種・結縁のない衆生、つまり本未有善の機であります。かつて歩いたことのない道は途中のことをどのように教えても、目的地を思いださせることはできません。目的地そのものを示さなければならない。この目的地が「本有の妙法蓮華経」です。

法華経の儀式のなかで、法師品以後、とくに宝塔品で多宝の塔があらわれ、そこに釈迦と多宝の二仏が並座し、さらに十方の諸仏が来至し、本化の菩薩が涌出して展開された、虚空会の儀式は、寿量品で魂を得て、そのまま「本有の妙法蓮華経」を表現していたのであります。

とはいえ、釈尊の法華経二十八品は、本門といえども、この「本有の妙法蓮華経」にいたる道を図に書いて示したようなものであります。

「本有の妙法」自体を具現化され、末代幼稚の凡夫に受持させてくださったのが、末法御本仏日蓮大聖人なのであります。

このように、同じく「諸法実相」といっても、迹門、本門、文底独一本門の立場で、読み方が異なります。

文底独一本門に約せば、御本尊そのものが諸法実相であります。さらに信心に約せば、大御本尊を受持しきったときに、妙法の生命が湧現し、幸福の諸法実相、人間革命の諸法実相として、わが人生が建設されてくるのであります。

人法一箇の大法を建立

日蓮・末法に生れて上行菩薩の弘め給うべき所の妙法を先立て粗ひろめ、つくりあらはし給うべき本門寿量品の古仏たる釈迦仏・迹門宝塔品の時・涌出し給ふ多宝仏・涌出品の時・出現し給ふ地涌の菩薩等を先作り顕はし奉る事、予が分斉にはいみじき事なり、日蓮をこそ・にくむとも内証には・いかが及ばん

末法流布の三大秘法の題目を、ほぼ弘め、同じく三大秘法の御本尊を建立したことを述べられております。

それは、法華経の文の上からいえば、本化地涌の菩薩の上首上行菩薩がなされるべきことであるが、凡夫僧である日蓮大聖人は、御自身がその上行再誕であるという表現は避けて、その先駆けとして「先立て粗ひろめ」また「先作り顕はし奉る」といわれたのであります。

この御文は、まえに、天台、妙楽、伝教等は本化地涌でなかったために、題目を流布し御本尊を顕すことができなかったと述べられた文と比べ合わせてみれば、その元意は明瞭であります。

大聖人が、いま現実に題目を流布し、御本尊を顕されているということは「先」「先立て」等と断

られているにしても、資格なくしてできることではない。したがって、大聖人は、法華経との関連でいえば、本化地涌の菩薩の上首上行の再誕であり、いま末法という時に出現して、この大法を建立されているのであります。

しかしながら、上行再誕というだけでは、日蓮大聖人の本地を明らかにしたことにはならない。いまこの文に「本門寿量品の古仏たる釈迦仏・迹門宝塔品の時・涌出し給ふ多宝仏」うんぬんとある御本尊の御図顕のもつ意味を知らなくてはなりません。

釈迦、多宝、さらに、久遠元初の無作三身如来である南無妙法蓮華経という〝仏〟の生命をあらわすためには、御自身の内に、その〝仏〟の生命がなくてはならない。事実、日蓮大聖人御自身「日蓮がたましひ(魂)をすみ(墨)にそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」(御書全集一一二四ページ)とおおせられているのであります。人法一箇の御本仏であるがゆえに、人法体一の御本尊を御図顕されたのであります。

そこに、大聖人の「内証――内なる覚り」がある。「日蓮をこそ・にくむとも内証には・いかが及ばん」とは、日本国の上下万人が、どのように大聖人を憎み、迫害を加えようとも、末法御本仏としての、この御境界は、微動だにさせられるものではないということなのであります。

されば かかる日蓮を此の嶋まで遠流しける罪・無量劫にもきへぬべしとも覚へず、譬喩品に云

く「若し其の罪を説かば劫を窮むるも尽きず」とは是なり、又日蓮を供養し又日蓮が弟子檀那となり給う事、其の功徳をば仏の智慧にても・はかり尽し給うべからず、経に云く「仏の智慧を以て籌量するも多少其の辺を得ず」と云へり

日蓮大聖人を憎み、迫害する罪の大きさと、大聖人を供養し、その弟子檀那となる者の功徳の大きさを示されているわけでありますが、このことは、とりもなおさず、久遠元初の仏であり、末法御本仏であるとの内証を示されているのであります。譬喩品の文は「斯の経を謗ぜん者、若し其の罪を説かんに、劫を窮むとも尽きじ」とある文であります。

また、功徳の依文とされているほうは、薬王品の「若し人、此の法華経を聞くことを得て、若しは自らも書き、若しは人をして書かしめん。所得の功徳、仏の智慧を以って多少を籌量すとも、其の辺を得じ」との文であります。

弘教の人は仏の使い

地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり、地涌の菩薩の数にもや入りなまし、若し日蓮地涌の菩薩の数に入らば豈に日蓮が弟子檀那・地涌の流類に非ずや、経に云く「能く竊かに一人の為めに

法華経の乃至一句を説かば当に知るべし是の人は則ち如来の使・如来の所遣として如来の事を行ずるなり」と、豈に別人の事を説き給うならんや

地涌の菩薩の先駆けとして出現したのは、日蓮大聖人ただ一人である。あるいは地涌の菩薩のなかに入っているかもしれない、もし大聖人が地涌の菩薩の数に入っているならば、師弟不二の原理からいって、大聖人の弟子檀那も、地涌の流類すなわち眷属でないわけがない、とおおせくださっているのであります。

地涌の菩薩とは、人からいわれて動くものではない。宇宙本然の妙法に生ききるがゆえに、大地から草木が本然的に生長していくように、みずから題目をあげ、社会のために、平和のために貢献していく生命なのであります。

そして、大聖人の弟子が地涌の菩薩であるとの証拠としてあげられているのは、法師品の文であります。

多少、前後を補って申し上げれば「若し是の善男子、善女人、我が滅度の後、能く竊かに一人の為にも、法華経の、乃至一句を説かん。当に知るべし。是の人は則ち如来の使なり。如来の所遣として如来の事を行ずるなり。何に況んや、大衆の中に於いて、広く人の為に説かんをや」との文であります。

すでに申し上げたように、法師品は、仏滅後の弘通を勧めて説かれたものであります。この文は、

まさにこれを勧めて述べた言葉なのであります。そして、この釈尊の言葉にこたえて迹化の菩薩たちが名乗りでたけれども結局、断られ、地涌の菩薩が、これにこたえる資格、力ありとして付嘱を受けたわけであります。

したがって、末法今時、この法師品の文のごとく、妙法を説き、広宣流布に戦っている人は、地涌の菩薩の眷属である、また、そうでなければならないことになります。「日蓮が弟子檀那は、そのとおり実践しているではないか」――こうおおせられているのであります。

さらに一歩掘り下げて「如来の使・如来の所遣として如来の事を行ず」ということが、すでに総じて仏と同格であり、無作三身の仏であることの証文であります。

そのことを明らかにするために、〝使い〟ということについて一言しておきたい。

一般的にいっても〝使い〟とは、使いを出した人の意思を代弁し、同じ資格において振る舞うという意義をもっております。

たとえば国と国とが平和条約を結ぶ場合、お互いに使いを出します。双方の合意によって条約文ができあがると、署名が行われる。そこに記されるのは使いの人の個人名であっても、それは一国の国民の総意を含んでいるのであります。

仏法においても、同じであります。妙法を説き弘通していく人は、仏の使いであり、仏と同じ資格において行動していることになる。ゆえに、法華経では、仏の久遠の弟子にのみ妙法弘通の使命を託したのであります。

このことは、逆にいうならば、末法今時に妙法を弘めている人、すなわち折伏している人は、仏の久遠の弟子である、ということになります。

なお「能く竊かに一人の為めに」が、こっそりと説くことをすすめたという意味ではなく、たとえそのような弘め方であっても、ということであり、望ましい、より偉大な実践の姿が、堂々と説いていくことにあることは、法師品の文から明らかであります。

時代により、また環境によって、公に実践し、弘教することができない場合もあります。しかし、つねに折伏弘教の精神を忘れず、随力弘通していく人こそ、真の地涌の菩薩の流類であり、御本仏日蓮大聖人の本眷属であることを、強く確信していっていただきたいのであります。

〝覚悟の人〟を諸天も賛嘆

されば余りに人の我をほむる時は如何様にもなりたき意の出来し候なり、是ほむる処の言よりをこり候ぞかし、末法に生れて法華経を弘めん行者は、三類の敵人有って流罪死罪に及ばん、然れどもたえて弘めん者をば衣を以て釈迦仏をほひ給うべきぞ、諸天は供養をいたすべきぞ・かたにかけ(肩)せなかにを(背)ふべきぞ・大善根(負)の者にてあるぞ・一切衆生のためには大導師にてあるべしと・釈迦仏多宝仏・十方の諸仏・菩薩・天神・七代・地神五代の神神・鬼子母神・十羅刹

女・四大天王・梵天・帝釈・閻魔法王・水神・風神・山神・海神・大日如来・普賢・文殊・日月等の諸尊たちにほめられ奉る間、無量の大難をも堪忍して候なり、ほめられぬれば我が身の損ずるをも・かへりみず、そしられぬる時は又我が身のやぶるるをも・しらず、ふるまふ事は凡夫のことはざなり

日蓮大聖人が凡夫のお立場で、流罪、死罪等の大難に遭いながら、それをものともせず今日まで弘教に励んでこられたのは、なぜであったかを述べられたところであります。

それは、ひとことでいえば、法華経で、釈迦、多宝以下、仏、菩薩、諸天らが、最大限の言葉で、末法に法華経を弘める者を賛嘆してくれているからであるというのであります。別ないい方をすれば、いっさい法華経に身を任せたということであります。

釈迦、多宝以下がほめた言葉とは「末法に生れて法華経を弘めん行者は……」から「……一切衆生のためには大導師にてあるべし」までです。カッコをつけて拝読していただければ、わかりやすいと思います。

この言葉のなかで「衣を以て釈迦仏をほひ給うべきぞ」とは、真の仏弟子としての資格を与え、さらにいえば、仏の子として大慈悲をもって包容してくださるということであります。諸天が供養し、肩にかけ、背中に負ってくれるとは、周囲の条件についてあらわれてくる変化の功徳であります。

「大善根」とは福徳を積むことであり、「一切衆生のためには大導師にてあるべし」とは、智慧が豊

かになる、社会のなかにあって、真実の民衆の指導者、智慧者になっていくであろうということであります。

これは、折伏の功徳をおおせられた御文と拝すべきであります。

このあと「釈迦仏多宝仏・十方の諸仏・菩薩・天神・七代・地神五代の神神・鬼子母神・十羅刹女・四大天王・梵天・帝釈・閻魔法王・水神・風神・山神・海神・大日如来・普賢・文殊・日月等の諸尊たち」がほめる、とあります。これについて、少々申し上げたい。

まず、一言にしていえば、妙法をたもつ人にとっては、宇宙であれ、自然であれ、人であれ、すべてその人を守り働く運行、リズムになるということであります。

「釈迦仏多宝仏・十方の諸仏」のおほめがあるとは、全宇宙の仏界、諸仏が法華経の行者を守るということであります。まことに頼もしいかぎりであります。その人の行くところ、すべて妙法のリズムにかなった人間革命の世界が開かれていくのであります。またすべての人々が、その人の仏界の生命に感応して心の底から味方となり、呼吸を合わせて、見事なハーモニーを奏でていくことができるということでもあります。

なかでも「釈迦仏」とは、自身の生命に仏智が湧現することを意味しております。また「多宝仏」とは客観世界で、その人の生活、環境に、福徳に満ちみちた実証が示されていく姿をあらわしております。「十方の諸仏」とは、周りのいっさいの人々の仏界をあらわしております。

また「菩薩」とは、自然、社会を含めた慈悲の働きがあらわれて、その人を守るということです。

その人自身の生命にそなわった、人々を救い楽しませてゆく菩薩界のいっさいの力があらわれることはもちろんのこと、慈悲を根底とする社会的指導者たちも、賛同をし、その人のもとに喜んで仕えていくということであります。

「天神七代」とは、国常立尊、国狭槌尊、豊斟渟尊の独化神三代と、夫婦一組で一代である泥土煮尊・沙土煮尊、大戸之道尊・大苫辺尊、面足尊・惶根尊、伊弉諾尊・伊弉冊尊の耦生神四代です。

「地神五代」とは、天照大神、天忍穂耳尊、天津彦彦火瓊瓊杵尊、彦火火出見尊、鸕鷀草葺不合尊の五柱の神です。これらは人王の以前の神々とされていますが、それら天地の神々も、すべてが諸天善神として働くとのおおせです。

「天も知る、地も知る、人も知る」という、いにしえの言葉にも通ずる内容であります。

「鬼子母神・十羅刹女」は有名であり、説明の必要もないでしょうが、法華経以前は悪鬼であったものが、法華経では善鬼としてつらなっています。善の生命を食う働きが、悪の生命を食って善を助ける働きへと転じているのであります。したがって、妙法をたもった人々にとっては、不幸を滅する働きとしてあらわれてくる。

「四大天王・梵天・帝釈・閻魔法王」等はすべて、宇宙、自然、社会の秩序を守る働きに名づけられたものです。社会でいえば、いわゆる世間の指導者、ないしはその人たちのもっている力をさしています。

「水神・風神・山神・海神」等は、自然の恵み、働きです。水にも、風にもそれぞれの独自の使命と力があります。山には山の生命があり、海には海の生命があります。そして、それらもすべて、妙法の生命活動としてのあらわれであります。したがって、それらもすべて、妙法を行ずる人を守る方向へ、守る方向へと動いていく。風強く、波高き日々であっても、妙法をたもった人が厳然と守られていくことは、かずかずの体験が証明するところであります。

また「大日如来」とは、法華経に座した大日如来であり、いわば生命力の一分の表現でありましょう。「普賢」は学理、「文殊」は智慧をあらわしております。学理と智慧の光にもつつまれていくのです。「日月」は日天、月天であり、太陽の生命力、月の働きであります。日天は、万物を成長させ、人々に燃える生命力を与えます。月天は、万物の安らぎの象徴であり、人々に安定と静かな光を投げかけます。

このようにして、いっさいの生命活動、森羅万象が、妙法をたもつ人を支え、守り、包容し、また手足となって働いていくとのおおせであります。

なお「無量の大難をも堪忍して候なり」とありますが、「堪忍」とは堪え忍ぶことです。娑婆世界にあってなにかをなそうとすれば、堪え忍ばなければならない。それほどたいへんな世界でもあります。

したがって、同じく堪え忍ぶのであれば、妙法流布のための堪忍であっていただきたい。一時はそれこそたいへんな、生命がけのときもあるかもしれない。しかし、妙法の堪忍であれば、かならず諸仏、諸天の加護があらわれるのは絶対にまちがいないというのが、御本仏日蓮大聖人の悟りの御説法

なのであります。

また「ほめられぬれば我が身の損ずるをも・かへりみず、そしられぬる時は又我が身のやぶるるをも・しらず、ふるまふ事は凡夫のことはざなり」との御文は、日蓮大聖人の御一身にあてはめられて述べられておりますが、凡夫というものの人情の機微を、じつに鋭くとらえられております。

ほめられても、そしられても、わが身を傷つけ、痛めていくのは、凡夫の習いであるようであります。ほめられて一生懸命になるのは「我が身の損ずるをも・かへりみず」のほうであります。これは、骨身を惜しまない気持ちになるということです。「我が身のやぶるるをも・しらず」というほうが、愚かのゆえに、そしられてみずからを破滅にいたらしめるということであります。

これを敷衍(ふえん)していえば、誤解があってはなりませんが、私どもの広宣流布という戦いにあっても、人を賛嘆し、その努力、功績を心からたたえていくことが、より以上の勇気と自信をもって前進していくために、大事な点であるということもいえるでありましょう。

貫こう「日蓮が一門」の生涯

いかにも今度・信心をいたして法華経の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給うべし

この段から以下は、弟子の信仰のあり方、化儀の広宣流布への方軌と実践方法を説かれています。まずここは「法華経の行者」「日蓮が一門」となりとおしなさい、と根本的な決意をうながされているのです。

あまりにも有名な御文であります。成仏の要諦も、日蓮正宗創価学会の根本精神も、この一文のなかにあるといっても過言ではありません。

「いかにも今度・信心をいたして」とは、なんとしても、この一生涯、信心を貫きなさいということです。この「いかにも」という表現に、大聖人は万感の思いを託されているように思います。というのは、私どもは、無始以来、生死流転の回数もまた数えきれないほどであります。元品の無明におおわれた生死の流転は、闇中の遠征のごときものであります。

いま「妙法」に巡りあい、久遠の御本仏にお会いできたということは、これまでの闇につつまれた生死流転を転換し、燦たる妙法の太陽の光明に照らされた、晴れわたった常寂光の空のもと、美しい花の咲き乱れる楽園を常楽我浄と遊戯しゆく〝本有の生死〟へと開く希有の機会なのであります。ゆえに「いかにも今度」といわれ、たとえなにがあっても、どんな事態に遭遇しても、この一生を信心しぬいていくことを強調せられているのです。どうか「いかにも今度」という一句を、深く胸におさめていただきたい。

「法華経の行者にてとをり」とは、〝法〟を中心にした立場であり、「日蓮が一門となりとをし給うべし」は、〝人〟を中心にした立場でおおせられております。別して「法華経の行者」とは、日蓮大聖

人お一人であり、大聖人の御一身のために法華経は説かれたといって過言ではないのです。そして、大聖人お一人が法華経のいっさいを身に読みきられて、正像二千年の釈尊の仏法に区切りをつけ、末法万年の闇を晴らす御本仏とあらわれられたのであります。

この御本仏日蓮大聖人の魂魄をとどめられた御本尊を受持しきることが、私どもにとって総じての「法華経の行者」としての実践を貫くことになるのです。しかし、その根底は、あくまで「日蓮が一門」という自覚でなくてはならない。そうでなければ、真実の「法華経の行者」でもない。

「日蓮が一門」の自覚に立つということは、具体的な私どもの実践に約して申し上げれば、わが同志の、広宣流布への異体同心の世界に生ききることであります。なぜかならば、日蓮正宗創価学会は、御本仏日蓮大聖人の生命である御本尊を根本にした、広布実践の団体であるからであります。日ましに種々の障魔の厳しき現象をみても、御書のとおりなのであります。ゆえに「日蓮が一門となりとをす」とは、日蓮正宗創価学会と運命をともにしていくことに通じていくのです。

しかも、この「日蓮が一門」という根本が欠けては、たとえ御本尊を護持してもなんにもならないのです。「生死一大事血脈抄」という重大な書にも「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」(御書全集一三三八ページ)とおおせのとおりであります。信心は即実践であります。ゆえに、行躰即信心とも述べられている。また、この「日蓮が一門となりとをす」の「なりとをす」ということが大事です。じつはこれ自体が、即、成仏に通ずるからであります。

成仏というと、なにか特別な理想人格になるように思われがちですが、それは色相荘厳の釈尊の仏

法の範疇です。日蓮大聖人は、凡夫即御本仏であられるから、この仏法は偉大なのです。

そこに仏法の真実がある。ありのままの人間性のなかに、偉大な光をはなつ仏法であるがゆえに、私どももそれにつらなっていくことができるのです。私たちにとって成仏とは、この世でもっとも尊い御本尊を受持しきって人生を全うしきることが、即、仏の生命とあらわれるのです。さらにいえば、なにがあっても「日蓮が一門となりとをす」と決めきった人生そのものが、すでに仏界に住した生き方であります。

大聖人と同じ精神で折伏弘教

日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや、経に云く「我久遠より来かた是等の衆を教化す」とは是なり、末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり

「日蓮と同意」とは、大聖人と同じ心、同じ精神ということであります。「法華経の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし」たとき、その身口意の三業によってはじめて、御本仏日蓮大聖人と同意と

なることができるのであります。

これは師弟不二の原理でもあります。不二とは、而二不二の義で、一往は二である。すなわち師と弟子という立場の相違は厳然としてある。だが、再往、その奥底においては、不二、すなわちまったく同じであり、等しいということであります。

この師弟不二が、仏法の師弟観の真髄なのであります。ゆえに、日蓮大聖人のお心をわが心とし、大聖人の御精神を自己の生命をかけた使命としていく「日蓮と同意」の人こそ、真の日蓮大聖人の弟子であります。口先や形式などは、やがては大聖人のお叱りをうけることでしょう。

「上野殿御返事」には「日蓮生れし時より・いまに一日片時も・こころやすき事はなし、此の法華経の題目を弘めんと思うばかりなり」（御書全集一五五八ページ）と述べられております。「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか」とは、この大聖人と同じく、広宣流布の使命に立ち、責任をもっていく人こそ、地涌の菩薩であるという御文であります。

そして、もし地涌の菩薩であることが決定的であるなら「釈尊久遠の弟子」であることも、また疑う余地はない。なぜかならば、法華経涌出品に、地涌の菩薩が出現したとき、驚いた弥勒菩薩の質問に答えて「我久遠より来かた是等の衆を教化す」、すなわち久遠の昔から教化してきた弟子であると述べられているからであります。

この「釈尊久遠の弟子」の「釈尊」とは、一往は法華経本門の教主釈尊でありますが、再往の辺を拝すれば、久遠元初の自受用報身如来であり、末法御本仏日蓮大聖人であります。日蓮大聖人は、久

遠よりこのかた、私たち地涌の菩薩を教化してこられたという意味です。

以上のことを結論づければ、日蓮大聖人と同意ならば、地涌の菩薩であることは決定的であり、それはそのまま日蓮大聖人の本眷属なのであります。

この御文を、現実社会において読まれた方が、初代会長牧口先生であり、二代会長戸田先生であった。戸田先生は、獄中において、みずから地涌の菩薩の眷属であり、御本仏日蓮大聖人の本眷属であるとの自覚に立たれたのです。

私たちは、この戸田先生という偉大な人格をとおして日蓮大聖人の仏法を知り、広布の道を進むことができるようになったのです。この妙法広布に生きる人がいかに尊いかは、あまりにも明瞭であります。またそうした人々に対して、いかばかりか御本仏の御称賛があることでしょうか。

さて、この「釈尊久遠の弟子」ということを生命論のうえからいえば、「釈尊」とはわが生命の内なる釈尊であり、南無妙法蓮華経如来であります。地涌の菩薩が、釈尊の久遠の弟子であるということは、上行、無辺行、浄行、安立行等の地涌の生命が、奥底の南無妙法蓮華経如来という本源に根ざした働きであることをあらわしているのであります。

「末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」

この末法の世に妙法蓮華経――三大秘法の南無妙法蓮華経を弘める人が地涌の菩薩の眷属である、

とのおおせです。したがって、いかなる立場の人であれ、どのような境遇の人であれ、みずからの使命のままに仏法弘通に挺身する人は、みな平等に最高の人生を歩んでいるのであります。仏法を〝弘める人〟こそ尊いのであります。経文には「当に起って遠く迎えて当に仏を敬うが如くすべし」とあるとおりであります。ゆえに、仏法弘通に活躍する人をへいげいしたり、非難、中傷することは、もっとも罪が重いといわなければならない。

「男女はきらふべからず」とは、いうまでもなく、男性であろうと女性であろうと、等しく地涌の菩薩であるということにおいて、まったく差別はないとのおおせであります。

男女の差別という問題は、社会的次元で、その役割と待遇の差別としてあらわれます。たしかに、男性にしかできないとまではいかなくても、男性に向いていて、女性向きでない仕事もありましょう。待遇は、その仕事に対して決定されるべきもので、男性だから、女性だからという理由で差をつけられるべきものではありませんが、それを前提としたうえでの個人差は、当然あってもやむをえないでありましょう。

しかし、もっとも根本的な問題は、人格の尊厳にかかわる次元で差別がつけられている場合に起こってくるものであります。そこに関係してくるのが、宗教のもっている男女観であります。

過去の多くの宗教は、原始的諸宗教は別にして、共通して男性中心的であったといわざるをえない。キリスト教もイスラム教も、その神は男性であると考えられる。

仏教もまた爾前経を根本とした諸宗派は、男性が中心であった。これらに対し、日蓮大聖人は「男

女はきらふべからず」とおおせられ、妙法を弘める人は、すべて等しく地涌の菩薩の眷属であると断定されているのであります。

すなわち、宗教的使命と資格において、男女のあいだにまったく差別はないとされることにより、人格的価値の真実の平等観を打ち立てられているのであります。ここにも、日蓮大聖人の仏法の内包する近代性と、人間の尊厳を裏づける偉大な原理があることを、どうか深く確信していっていただきたいのであります。

「皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」とは、いかに、題目を唱えることがむずかしいか、ということであります。地涌の菩薩でなければ、題目を唱えられないのです。

まず、人身を受けるということさえまれであります。人間についての、仏法上の一つの定義は「聖道正器」ということであります。人間であればこそ、聖道（みずからの成長をめざす四聖、究極するところ仏界、すなわち成仏への道＝宗教）を歩んでいくことができるのであります。まさしく、宗教は、人間生命の核心であります。この核心を失えば、人間ははつらつたる生命の光を失い、硬直化し、化石化するにちがいない。

しかし、そのなかにあって、ほんとうに偉大な宗教に遭遇することも、なかなか困難であります。私どもは、その意味で、まことに「唱へがたき題目」を唱えていることに、感謝の気持ちが込み上げてきます。

ともに「地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目」とは、たとえ、いかなることがあっても

「但南無妙法蓮華経なるべし」の御金言のままに、題目を唱えきっていくことであります。

さらに、菩薩の本領は「誓願」ということにある。そして、地涌の菩薩の誓願とは「法華弘通」にあります。ゆえに、われわれも地涌の菩薩の眷属である以上、心から周囲の人々を幸せにしきっていくという誓願の唱題が大切です。厳しくいえば、誓願なき唱題は、地涌の菩薩の唱題ではないのであります。

広宣流布実現への大確信

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是あに地涌の義に非ずや、剰へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的とするなるべし

妙法流布の原理を示され、広宣流布実現への大確信を述べられた、有名な御文です。

南無妙法蓮華経は、日蓮大聖人まずお一人が唱えはじめられ、そこから二人、三人、百人と「唱へつたふる」ようになった。未来においても、同じ原理である、とのおおせであります。

この御文は、ひじょうに深い意味がこめられております。

一つは、このまえの「皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」をうけて、総じては、題目を唱える人は、すべて地涌の菩薩であるけれども、その広まっていく原理は、まず一人が立ち上がって唱えはじめ、そこから二人、三人、百人と広がっていく。かならずそこに総、別があるということであります。

この別してのお一人が、いうまでもなく御在世においては、日蓮大聖人御自身であります。しかし、それは御在世のみならず「未来も又しかるべし」とおおせであります。

次元が異なりますが、創価学会においても、初代会長牧口先生が入信し、折伏に立ち上がられたところから二人、三人と「唱へつたえ」、約三千人にまでなった。

戦後は、第二代会長戸田先生が、東京の焼け野原に立って、折伏弘教を決意し、そこから二人、三人、百人と「唱へつたえ」て、現在の一千万人以上にまでなったのであります。

私どもは、この〝一人立つ精神〟を正しく受け継いでいくことを絶対に忘れてはならない。

ともかく、最初の一人が肝心なのです。それがいっさいの淵源となって広がっていくというのは、広布の絶対のあり方と確信していただきたい。

「新池殿御消息」にも「抑因果のことはりは華と果との如し、千里の野の枯れたる草に螢火の如くなる火を一つ付けぬれば須臾に一草・二草・十・百・千万草につきわたりてもゆれば十町・二十町の草木・一時にやけつきぬ」（御書全集一四三五ページ）とあるとおりです。

たった一本のマッチが、大火となっていきます。その一本が問題なのです。

つぎに「唱へつたふる」ということであります。「唱へ」とは自行であり、「つたふ」とは化他であります。

「三大秘法抄」に「末法に入て今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」（御書全集一〇二二ページ）といわれるように、自行と化他の両方をかねそなえた実践でなければ、大聖人門下の正しいあり方とはいえないことを知っていただきたい。

また「唱へつたふる」を自行、化他に分ける意義については、「御義口伝」の「涌出品一箇の大事・第一唱導之師の事」に、つぎのようにあるのに照応しているのであります。

「御義口伝に云く涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり、本化の菩薩の所作としては南無妙法蓮華経なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切衆生を霊山浄土へ引導する事なり」（御書全集七五一ページ）

うんぬんと。

「唱へ」は唱導の〝唱〟であり、「つたふ」は〝導〟に対応します。みずから唱えるとともに、これをいっさいの人々に伝え、導いていこうとする人こそ、地涌の菩薩といえるのであります。

「未来も又しかるべし」――いつの時代にあっても、絶対に変わらない根本原理が、これなのであります。

どうか、日蓮大聖人の仏法を信じ、学会精神を継承した皆さん方も、おのおのの立場で、一人立って「唱へつたふる」真実の地涌の菩薩の眷属であっていただきたい。

〝一人立つ〟とは、自分の家庭、職場、地域等、自分自身がかかわっているいっさいの世界で、妙法

の広宣流布に全責任をもっていくことです。もっとも身近な、そして地味な活躍に真の仏法があり、広布があることを忘れないでください。御本仏日蓮大聖人の御使いとして、いまここに、自分はいるのだと自覚することです。

どのような立場であれ、一人ひとりが自分自身だけの、他のだれとも交代することのできない人間関係をもっております。家族、職場、さまざまな友人関係等々、すべてについて、かならずその人独自の世界を形づくっている。それが、妙法のうえからみれば、自身の国土であり、自身の眷属であります。そこに、妙法流布の責任と資格とをもっているのは、その人一人だけであるということです。

ゆえに、一人立つという原理が大事なのであります。そして、おのおのの世界、国土にあって、そこから立ち上がっていくのが「地涌の義」であります。

なお、この御文は、広宣流布は、かならず民衆の大地から盛り上がって成就していくことを述べられたものです。広宣流布は、けっして権力によるものではない。「未来も又しかるべし」の強い御確信の金言を深く拝すべきであります。

「剣(あまつさ)へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的(まと)とするなるべし」

「大地を的とする」とは、絶対に外(はず)れるわけがない、ということです。したがって、この御文は、かならず広宣流布し、日本のあらゆる人々が、日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華経を唱える時がくるとの御確信であり、予言であります。

「日本一同に」とは、あらゆる立場の、あらゆる仕事にたずさわる人々ということです。

政治家も、教育者も、あらゆる職業の人々、家庭の主婦、学生も、すべての人が妙法を信受し、仏法を研鑽して、人生に価値を創造し、社会に貢献していくようになる。この総体革命の姿を「日本一同に」といわれているのであります。

ただし「日本一同に」といわれたからといって、日本だけにかぎって他の国へは弘めないということではありません。それは「一閻浮提に広宣流布して」と、法華経の文にも、大聖人の諸御書にも述べられていることから、明らかであります。

しかし、強い意識をもって広宣流布のために取り組んでいく対象は「日本」であるという御教示が、とくに「日本一同に」といわれるお言葉のなかに含まれているとも考えられます。その意味で、私どもとしては、日本の広布実現こそ、世界の平和と人類の幸福のために、妙法の力が利益していく源泉であると確信していくべきであります。

「法華経に身をまかせる」人生を

ともかくも法華経に名をたて身をまかせ給うべし、釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏・菩薩・虚空にして二仏うなづき合い、定めさせ給いしは別の事には非ず、唯ひとへに末法の令法久住の故なり、既に多宝仏は半座を分けて釈迦如来に奉り給いし時、妙法蓮華経の旛をさし顕し、釈

迦・多宝の二仏大将としてさだめ給いし事あに・いつはりなるべきや、併ら我等衆生を仏になさんとの御談合なり

信心の究極の姿勢は、法華経に名を立て、身をまかせることです。

「ともかくも」というお言葉に、いっさいを究められた日蓮大聖人の、無限の慈悲を感じます。この御心境は、痛いほど胸に迫ってくるのです。凡夫である私どもに対し、浅智や、邪智や愚かさのために、退転していくことを強く戒められているのです。

戸田先生が「私の悩み」と題して、つぎのように書かれたことがありました。

「この私の悩みは、信心に強く立つものが少ないことである。また、初信の者が、大御本尊のご威徳を信ぜずに、退転することである。これらの者は、なんと浅はかな者であろうか。清水のごとく、こんこんとわき出る功徳の味を、味わいきれずに、死んでしまうのである。なんと、かわいそうなことではないか。私の胸のなかは、キリで、もみこまれる思いで一杯である」(巻頭言から)と。

少々の人生の荒波に、敗北しゆくほど悲しむべきことはない。現代的にいえば、月へ行くにも軌道がある。その軌道をふみはずしたならば、永久に帰ってこられないのです。同じく、生命にも宇宙に通ずる根本軌道というものがある。それをふみはずせば、永劫に闇の流転となってしまう。〃ともかく私のいっていることを信じて、法華経に身をまかせなさい〃との御心境が、この「ともかく」の文字ではないでしょうか。

「法華経に名をたてる」とは、この妙法の広宣流布に生きることを、なによりの誇りとしていくことであります。それぞれの仕事において名を立て、信頼される人になっていくことは、もとより大事であります。だが、永遠の生命観に立った場合、もっとも根本的かつ永続的な栄誉とは、仏法の広布のために、どれだけの仕事をし、貢献したか、ということです。その栄誉のみが、時とともに永遠に輝いていくのです。

「法華経に身をまかせる」とは、わが人生の究極の依処を御本尊におくということです。それは具体的には、日々の勤行、広宣流布のための活動を実践しぬいていくことです。「法華経に身をまかせた人生ほど強く、偉大なものはない。宇宙大の法理と力のうえに、わが人生をおいていくことになるからです。

なぜ「法華経に名をたて身をまかせ」るべきか——それを、つぎの「釈迦仏・多宝仏」以下に述べられております。

一言にしていえば、法華経の儀式と説法の目的は、末法の私どものためである、ということです。でなければ、仏法は空論になり、観念の世界の遊戯に終わってしまう。仏法究極の哲理といえども、しょせん、私ども一人ひとりのために説かれたものです。

さきにも申し上げましたが、法華経は、在世衆生の代表である声聞への授記のあと、法師品、宝塔品以下は、釈尊滅後の弘通をだれがするかを主テーマに展開されております。

すなわち、宝塔品、提婆品での釈尊の諫暁——呼びかけに応じて、勧持品、安楽行品で迹化の菩薩

たちが名乗りをあげますが、涌出品で釈尊は「止みね善男子」としりぞけ、本化地涌の菩薩を召しいだす。そして、この本化の菩薩についての弥勒たちの疑問に答えて、久遠成道の寿量の説法があり、神力品で本化への付嘱、嘱累品で総付嘱が行われるのであります。

したがって、この一往の文上の流れでみれば、法師品のあとの宝塔品で多宝の塔があらわれ、釈迦、多宝二仏並座のもとに行われた法華経の儀式は、地涌の菩薩に末法の妙法弘通の使命を託すためであったといえます。これが「唯ひとへに末法の令法久住の故なり」といわれている一往の義です。

これは、しかし、一往文上の辺であり、化儀の側面であります。再往文底からみれば、じつはこのなかに、末法の衆生を成仏せしめるべき、末法流布の法体が明かされている。すなわち、家の設計図と家そのものとの関係のごとく、この法華経の二仏が多宝塔中に並座し、虚空会において「妙法蓮華経の旛をさし顕し」「さだめ給」うた儀式が〝そのまま〟三大秘法の御本尊のお姿をあらわしているのであります。この本文では「妙法蓮華経の旛」といわれているのがそれであります。

この御本尊こそ、末法に流布される法体であり、一切衆生を末法万年尽未来際にいたるまで即身成仏させる秘法であります。「末法の令法久住」の文の元意はここにあります。ゆえに「併ら我等衆生を仏になさんとの御談合なり」とおおせられているのであります。

すなわち、この御本尊こそ、八万法蔵の仏法の結論であり、法華経という宇宙根本の法理を事実のうえに作動させた当体であり、この大仏法のコースを歩んでいくならば、成仏はまちがいないといわれているのです。

なお、御本尊の相貌に約していえば「妙法蓮華経の旛」とは、中央の「南無妙法蓮華経 日蓮」をさし、「釈迦多宝の二仏大将として」が、その左右にしたためられている仏界の代表を意味しております。

生命の姿あらわす「虚空会」

日蓮は其の座には住し候はねども経文を見候に・すこしもくもりなし、又其の座にもや・ありけん凡夫なれば過去をしらず、現在は見へて法華経の行者なり又未来は決定として当詣道場なるべし、過去をも是を以て推するに虚空会にもやありつらん、三世各別あるべからず

ここは、日蓮大聖人のお振る舞いが法華経に説かれているとおりであり、したがって、未来はまちがいなく仏であると、深い御確信を述べられたところであります。

示同凡夫のお立場ですから、あの法華経の「虚空会」の儀式に、地涌の菩薩としてつらなっていたかどうか、という過去のことはわからない。ただ、経文をみれば、そのときの様子はハッキリしているし、いまの御自身の振る舞いが「法華経の行者」として、地涌の菩薩の振る舞いであることも、だれ一人として否定できない事実の問題である。

したがって、このことから過去を推察するに「虚空会にもやありつらん」――おそらくつらなって

いたであろう、とおおせであります。

大聖人は、血脈書、あるいはそれに準ずるような御抄――たとえば「三大秘法抄」などにおいては、まちがいなく霊山において、虚空会において付嘱を受けた等といわれておりますが、一般の御書では、あくまで客観的に論じられております。

過去にどうであったか、ということは、凡夫の知ることのできない問題であって、いたずらにそういう論議をすると、かえって神秘主義におちいり、誤解させてしまう。本抄のように、経文にどうあるか、そして大聖人の現実のお振る舞いがどうであるか、その照合から過去を推測する、このいき方は、今日の科学や実証的な歴史学のとる方法と相通ずるものといえましょう。

「三世各別あるべからず」――過去と現在、現世と未来が、まったく無関係で、バラバラであるわけはない、ということです。「過去の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ。未来の果を知らんと欲せば、その現在の因を見よ」と、仏法は教えております。現在の、だれもが見ることのできる事実を根本にして、そこから過去を知り、未来を知っていく――これが仏法のいき方です。

その根底には、いかなる原因が、いかなる結果を生ずるかという、厳然たる法則性に対する透徹した眼がある。ゆえに、仏は三世を知っているとされるのであって、けっして神秘的な、超能力的なものではない。「仏法は道理なり」という御教示を、深く胸に刻んでいただきたいのであります。

ここで、もう一つ申し上げておきたいのは虚空会の儀式ということです。

経文のうえでは、まえにも述べたように、法華経の見宝塔品第十一から嘱累品第二十二まで、虚空

に浮かんだ多宝塔中に釈迦、多宝の二仏が並座し、大衆もみな、虚空に住在して説法が行われたことをいいます。

だが、これが三千年前のインドで、現実に起こった事実であるということは、とうてい納得できない。大勢の人々がそのままで空中に浮かぶということ自体、あまりにも非現実的であるし、多宝の塔についても、高さ五百由旬、タテ、ヨコ二百五十由旬と記されている。五百由旬とは、計算の仕方によっても違いますが、小さいほうでとっても、地球の半径の長さになる。

では、法華経に説かれていることは、空想の産物であって、ただの作り事にすぎないのかといえば、それは大きい誤りであります。これを、どのように考えるべきか、という問題であります。

端的にいえば、釈尊がみずから悟ったところのものを説くのに、虚空会の儀式という形でしか表現することができなかったがゆえに、このような超現実的ともいえる形式をとったのであります。

戸田先生が、法華経の荘厳な儀式をさして「釈尊己心の儀式である」といわれたのは、この意味であります。

虚空会の儀式が、釈尊の悟ったものをあらわしているということは、虚空会の儀式自体が仏の悟りの当体、すなわち、法体をあらわしているということであります。この仏の悟りの法体を、釈尊は虚空会の儀式としてあらわし、天台は一念三千の法理として示し、日蓮大聖人は、御本尊として、末代幼稚の凡夫が、即座に受持できるようにしてくださったのであります。

したがって、大聖人はここで釈尊の法華経について論じられているので「過去をも是を以て推する

に虚空会にもやありつらん」とおおせられておりますが、さらにわれわれの立場にあてはめて拝すれば、御本尊を受持し、日々、勤行し、唱題していること自体、日々、虚空会につらなっていることに通ずるのであります。

さらに、生命論からいえば、わが生命そのものが虚空会であります。わが色心の作用を起こしている根源は、まさしく虚空であります。しかし、その虚空とは、たんなる〝無〟ではない。無限の創造性と力感に満ちみちた生命の場であります。

また、永遠の生命そのものが虚空会であります。霊鷲山会が、虚空会の儀式とあらわれたということは、まさしく、生命の永遠であることを説こうとしたものです。

御本仏の境界を吐露

此くの如く思ひつづけて候へば流人なれども喜悦はかりなしうれしきにも・なみだ・つらきにもなみだなり涙は善悪に通ずるものなり

法華経を身をもって読みきられた、御本仏の絶対的な境界を吐露された御文であります。

まことに日蓮大聖人の御文は、名文であります。読むたびに、私たちの胸中に、慈父の響きと、広

布の大感情が込み上げてまいります。しかも大聖人の文章は、いわゆる机上に作られた美文ではない。文は生命なり、文は境涯なり――としみじみと痛感させられるのであります。

あの流罪の地・佐渡において、地獄のどん底と思われるような御生活にあって、なお全宇宙をもつつむであろう境涯で、お手紙をおしたためになる御心境は語るすべもないほどです。

いにしえの天平時代より、江戸時代にいたる一千余年間にわたり佐渡へ流罪された人は、無数でありましょう。そのすべては、悲哀と激憤と苦痛と忍従と――さらには呻吟の声が大地に刻まれてきたといってよいでしょう。しかし、ただ一人、澄みきった秋の青空のごとく、また陽光を浴びた春の大海のごとく、淡々たる御心境で「喜悦はかりなし」と叫ばれた人がいるでありましょうか。

世にいう哲人、賢人、文人の人々も、ひとたび悲惨な生活におかれるや、天を仰いでうらみを隠し、地に伏して嘆きを深くしたのであります。だが、もっとも悲哀のなかにあっても、もっとも強く生ききったその人格は、まさしく生命の革命劇を、歴史のうえに燦たる光をもってとどめたものといえると思います。

この大聖人の御心境を深くかみしめながら、何回も何回も繰り返しながら拝読し、私たちは、大聖人の叫びを胸中に響かせていこうではありませんか。

「此くの如く思ひつづけて候へば」とは、法華経が、せんずるところ、日蓮大聖人お一人のために説かれたものであったということであります。あの荘厳な虚空会の儀式、釈迦、多宝の二仏並座、十方分身の諸仏の来集等々すべて「末法の令法久住の故」であり、「我等衆生を仏になさんとの御談合」

であった。すなわち、一往は上行再誕、再往は本地久遠元初の自受用報身としての日蓮大聖人御自身のために行われた儀式であり、諸仏の来集であった。ゆえに、これほどうれしく、ありがたいことはない、とのお言葉なのです。

「なみだ」とは、崇高なる大感情の表現です。抑えても抑えられない、また外的条件がどんなであれ、それを突き破って湧きあがってくる偉大な感情の噴出を「なみだ」によってあらわされているのであります。

「流人なれども」――いま、大聖人のお立場は、流人という、まことに厳しく、つらいものである。これは、相対的次元の幸、不幸の現象です。その次元では、この世でもっとも不安定な、不幸な姿であられる。しかし、内心の胸中に確立された境界――絶対的幸福の次元では、この世でだれよりも豊かで、広大かつ不動の幸福を満喫されているのであります。

この相対的幸福と絶対的幸福という点について一言、申し上げておきたい。

それは、絶対的幸福とは、相対的幸福の延長線上にあるものではない、ということです。これを、もう少しわかりやすくいいますと、経済的に豊かになり、健康で、周りの人々からも大事にされ……等々の、いっさいの幸福の条件が満足しているのが、絶対的幸福ではないということです。

相対的には、いくら不幸であっても、絶対的幸福を確立することはありうる。逆に、相対的な幸福の条件は、どんなにととのっていても、絶対的幸福にほど遠い人も少なくありません。相対的に幸福

の条件をもっている人は、私どもの周囲をみればたくさんいるでしょう。仏法を信仰していない人で、私たちより幸せそうに見える人々がたくさんいるのはこの例です。相対的には不幸でも、絶対的幸福を確立した例が、いまここで述べられている大聖人の境界なのです。

相対的なものは、どこまでいっても相対的です。どんなに資産家であれ、有名人であれ、社会の激変によって、一夜にして貧乏のどん底に陥る場合も少なくありません。また、どんなに健康であっても、事故にあえば、一瞬にして重体となることもある。なにもなくとも、しだいに年をとってくれば、だれしも、さまざまな病気が出てくるものです。

ゆえに、相対的幸福を形成しているものは、自己と環境的条件との相関関係にすぎないのです。かんたんな例でいえば、なにかを食べたいという自己の欲望と、それに対応するご馳走が出てきたという環境的条件、このお互いの関係によって生ずるのが、相対的幸福なのです。

これに対し、絶対的幸福とは、自分が心に決めた使命感、目的観と、それを実践しているという事実とのあいだの関係で出てくるものであり、生命自体の充実感、満足感です。これは、有為転変する周りの条件に支配されるのでなく、みずからの意志で決定できるものです。したがって、絶対的となりうるのです。

さらに、これを掘り下げていえば、その自分の定めた目的観、使命感が、宇宙とともに不変常住の法に合致していることが、絶対的幸福の完璧な要件であります。

したがって、無始以来、常住不変の妙法を堅く信じ、広宣流布というみずから決めた目的観、すな

わち大願に生き、実践しぬく心にこそ、真実の絶対的幸福が築かれることを、どうか皆さんは強く確信してください。とともに、それこそ、人間としてもっとも尊い生き方であることを、最大の誇りとしていっていただきたいのであります。

彼の千人の阿羅漢・仏の事を思ひいでて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華経と唱へさせ給へば、千人の阿羅漢の中の阿難尊者は・泣きながら如是我聞と答え給う、余の九百九十人はなくなみだを硯の水として、又如是我聞の上に妙法蓮華経とかきつけしなり、今日蓮もかくの如し、かかる身となるも妙法蓮華経の五字七字を弘むる故なり、釈迦仏・多宝仏・未来・日本国の一切衆生のために・とどめをき給ふ処の妙法蓮華経なりと、かくの如く我も聞きし故ぞかし

ここは、経典結集のありさまを述べられたところですが、「如是我聞」ということについて申し上げたい。

この言葉は、あらゆる経文の冒頭にあり、その経文の骨髄をあらわした題目を受けた言葉です。「是くの如く我聞きき」と読みます。私は釈尊の説法をこのように聞いたという意味です。

文殊師利が妙法蓮華経と唱え、阿難が如是我聞と答え、他のすべての人が妙法蓮華経如是我聞と書

きつけたということは、そこにいたすべての人々が、釈尊の説法の真髄は妙法蓮華経であり、妙法蓮華経を如是我聞したと一致して述べたということです。

この如是我聞ということは、ただたんに聞いたというような簡単な言葉ではない。もっとずっと強い主張が込められています。天台大師は法華文句で「我聞とは能持の人」であると述べている。つまり「仏法の教えの真髄はこうだと私は確信する。したがって、この経文のとおりに仏法を実践し、身をもってこの経文を証明していきます」といった決意が込められた言葉です。

日蓮大聖人も「釈迦仏・多宝仏・未来・日本国の一切衆生のために・とどめをき給ふ処の妙法蓮華経なり」と如是我聞されたとおおせられております。ゆえに妙法流布のために、種々の大難を受けて法華経を証明され、末法万年の一切衆生のために、御本尊をお遺しくださったのです。

この日蓮大聖人の仏法を、私たちのためにとどめおかれた人間革命と世界平和の根本法であると、信徒の立場で如是我聞されたのが、まさしく牧口初代会長であり、戸田二代会長でありました。如是我聞されたがゆえに、広宣流布のために亡くなられ、また生きぬかれたのであります。これこそ、学会精神の骨髄中の骨髄であることを生命に刻み、染めていただきたいのであります。

さらに、釈尊なきあと、文殊師利、阿難をはじめ弟子たちが、涙をながして仏の教えを繰り返し、涙をもって経文に記したということは、仏の大慈悲に対する無量の感慨をあらわしております。そして、この弟子の大感情が、仏法を未来へ流れ通わしむる原動力となったということでもあります。

大聖人もまた、釈尊、法華経に対する報恩感謝と、一切衆生への大慈悲の涙をもって、末法万年弘

通の大白法を建立されたのです。「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までも流布するべし」（御書全集三二九ページ）とおおせられているのは、この意味であります。

私どももまた、御本仏日蓮大聖人が忍ばれた苦難に、心から報恩感謝を申し上げ、偉大な仏法に巡りあえた大歓喜をもって、仏法を語り、未来へ、全人類に流れ通わしめていこうではありませんか。

現在の大難を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思うて喜ぶにもなみだせきあへず、鳥と虫とはなけども鳴なみだをちず、日蓮は・なかねども・なみだひまなし、此のなみだ世間の事には非ず但偏に法華経の故なり、若しからば甘露のなみだとも云つべし、涅槃経には父母・兄弟・妻子・眷属にはかれて流すところの涙は四大海の水よりもををしといへども、仏法のためには一滴をも・こぼさずと見えたり

「現在の大難」とは、佐渡流罪です。一つにはつらい。しかし再往、この大難は法華経の行者として受けている大難である。「未来の成仏」は、現在こうして法華経の行者であることからも、絶対にまちがいはない。いずれにせよ、それを思うにつけ、涙がとめどもなく溢れてくるとのおおせです。

涙は、奥深い心の思いをあらわすものです。この一つをとってみましても、日蓮大聖人がどれほど甚深無量の思いで、一瞬一瞬を過ごしておられたかが推察されるのであります。

「鳥と虫とはなけどもなみだをちず」――鳥や虫は、さまざまな音色で鳴き、その幾種類かは鳴き音で有名です。しかし、そこには鳥自身、虫自身の深い思いといったものはない。「日蓮は・なかねども・なみだひまなし」――たいへん有名な御文ですが、この一節こそ、御本仏日蓮大聖人の大慈悲をあらわしているところです。

「此のなみだ世間の事には非ず但偏に法華経の故なり」と述べられていますが、日蓮大聖人の涙は、つらいとか、苦しい、悲しいといった世間のことで流す涙ではない。ただ法華経を流布して末法万年の一切衆生を救おうとして流す涙である。「若しからば甘露のなみだとも云つべし」――甘露とは、古代中国の伝説で、理想的な世の中で天が降らせる甘い露といわれ、そこから、あらゆる人間の苦悩をいやし、不老不死をもたらすものとされています。日蓮大聖人の流される涙が三大秘法の大御本尊として結晶し、人々の生命をうるおし、悩みを除き、不老不死の生命を与えてくださっていることは、私どもが身をもって知っている事実であります。

涅槃経の文は、三世の生命観のうえから、われわれが永遠の生命の流転のなかにあって、世間のことでは、いやというほど涙を流すけれども、仏法ゆえに涙を流したことは一度もないというのです。これは仏法に巡りあうことが、いかにむずかしいか、また、たまに巡りあっても、真実の大信仰心を起こす人が、いかにまれであるかを述べたものです。

日蓮大聖人の御一生は、仏法ゆえの涙の連続であられた。私どもも、仏法のために涙する尊い一生を送ろうではありませんか。

法華経の行者となるは過去の宿習

法華経の行者となる事は過去の宿習なり、同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁なるべし、
仏なりとも権仏となるは又宿業なるべし

いまこうして法華経の行者、実践者となったということは、今世において、たまたま法華経に巡りあったといった浅い縁ではない。過去世において法華経を行じていたがゆえに、その宿習によって、いままた法華経の行者になっているのだとおおせです。

たとえば、非情の草木であっても「仏とつくらるる」――御本尊とつくられる草木もある。牢獄の格子となる草木もある。宿縁なりと表現されたのは、草木の場合、みずから意識し、働きかけることはできません。どういう人に巡りあうかという、それ自体に宿した縁によって、なにになるか、つくられるかという、それぞれの立場をあらわしてくるのです。

すべて、過去、現在、未来にわたる因果の理法で、一つの結果には、かならずそれをもたらす原因がある。同じ仏といっても、小乗教の仏もあり、権大乗教の仏もありというように、みな使命が違う。仏としての力が違う。これもぜんぶ宿業、すなわち過去世における行為によってもたらされたも

のであるということです。

私どもは、いま、このように日蓮大聖人の本眷属として、南無妙法蓮華経の広宣流布に励んでいます。この確固たる人生にくらべ、世間の生き方は、相対的なものです。

たとえば、淡雪は、太陽の光にたちまちとけてしまう。蜃気楼もまた、すぐ消え去るでありましょう。根無し草の波のまにまにただよう姿も、あまりにも不安定であります。有為転変の無常の人生のなかに、埋没しゆく生き方は、なんと弱く、幻のごとく、はかないものでありましょうか。

有名の二字に酔いしれた人の、ひとたび名聞の皮がはがれたあとのみじめな姿、権力の座から一転して脱落していった人のなんと小さな、一瞬の〝修羅のおごり〟のごとき姿などを見るたびに、その根の浅さ、底の浅さがあまりにも悲しい。これらの有為転変の、無常の諸相の奥底を流れる妙法の淵源に、わが身をすえた人生こそ、もっとも光輝につつまれたものである、と確信すべきでありましょう。われは地涌の菩薩の眷属なり、との自覚に立たれた戸田先生の叫びのなかに、無量の恩師の思いが、私の胸にこだましてくるのであります。

私どももまた、こうした自身の使命に目覚めれば、無限の力がわいてくるはずです。私が頂戴した戸田先生のお歌に「古の奇しき縁や萌え出でて　咲けや雄々しく大和桜と」という一首があります。今日の創価学会を築いてきた先輩たちは、皆「古の奇しき縁」を強く自覚して戦ってこられました。

皆さんも、いまこうして、日蓮正宗創価学会の一員として活躍していることは、過去の宿習であると決めて、自己の使命を果たすため、しっかりと励んでください。そこにのみ、所願満足の人生があ

ることを確信していただきたい。

生きよう折伏弘教の尊い生涯

此文には日蓮が大事の法門ども・かきて候ぞ、よくよく見ほどかせ給へ・意得させ給うべし、一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給へ、あひかまへて・あひかまへて・信心つよく候て三仏の守護をかうむらせ給うべし、行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし、南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経、恐恐謹言。

「日蓮が大事の法門」ということについては、講義の最初で述べたとおりです。仏法の肝要であり、末法流布の大法は何かということ、大聖人が末法の御本仏であること、さらに大聖人の弟子の信心のあり方はいかにあるべきか等、まさしく大聖人の仏法の大事が凝縮されております。ゆえに「よくよく見ほどかせ給へ・意得させ給うべし」と念をおされているのです。

「よくよく見ほどかせ給へ」とは、深く理解していきなさいということです。「意得させ給うべし」とは、生命に刻んで、この御書どおりの振る舞い、実践をしていきなさいとの御教示です。「一閻浮

提第一の御本尊」です。大聖人の仏法が一閻浮提第一であり、大御本尊がその肝要中の肝要であることは、絶対にまちがいありません。

あとはわれわれの信心です。ゆえに「あひかまへて・あひかまへて・信心つよく候て」です。

信心は、なりゆきでいつか深まってくるものではない。「あひかまへて」とは、発心をしなさいということです。なにがあろうとも、よし、これを転機に御本尊根本で一歩前進していこう、という勇敢な信心が大切です。その信心のあるところ、釈迦、多宝、十方の諸仏の守護が、厳然と働きをあらわしてくるのです。

自身にあっては、仏界の湧現という、もっとも根底的な生命の変革がなされるというのが、釈迦仏の守護にあたります。功徳に満ちあふれた生活の実証が多宝如来の守護です。十方の諸仏の守護とは、周囲の人々が正法に目覚め、相互に尊敬しあっていく、理想的な人間共和の社会が現出するということです。

「行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず」以下は、しっかり暗記していただきたい。この御文の「行学」ということについては、さまざまな機会に申し上げてきました。そこでここでは、ただ一点だけ申し上げておきます。

それは「行学たへなば仏法はあるべからず」ということです。仏法は行学のなかにある。行学の実践をする人間の振る舞いのなかにあるということです。経文や書物や文字のなかにあるのではない。仏法は、御書を学び、大聖人の教えどおりに実践する一人ひとりの生命のなかにあらわれるのです。

その仏法の大運動を展開している人間と人間、信心と信心の錬磨向上のなかにこそ、現実における仏法直道の脈搏があることを知らなければなりません。

「我もいたし人をも教化候へ」――自行化他の信心です。自分だけ信心していればいいというのは、大聖人の仏法の本格派の実践者ではない。自分も実践し、人にも教え、伝えていくのです。

「行学は信心よりをこるべく候」――行学の基となるのは信心です。逆にいえば、信心はかならず行学とあらわれる。この信・行・学の三つが、大聖人の仏法の実践の永遠の規範なのであります。

「力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし」――随力演説で、自分の境遇で、自分の全力を出して折伏し、一文一句でも仏法を語っていきなさい、ということです。

〝一切衆生を救う〟との大確信

追申候、日蓮が相承の法門等・前前かき進らせ候き、ことに此の文には大事の事どもしるして進まいらせ候ぞ不思議なる契約なるか、六万恒沙の上首・上行等の四菩薩の変化か、さだめてゆへあらん、総じて日蓮が身に当ての法門わたしまいらせ候ぞ、日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にもやあるらん、南無妙法蓮華経と唱へて日本国の男女を・みちびかんとおもへばなり、経に云く一名上行乃至唱導之師とは説かれ候はぬか、まことに宿縁のをふところ予が弟

子となり給う、此の文あひかまへて秘し給へ、日蓮が已証の法門等かきつけて候ぞ、とどめ畢んぬ。

冒頭の部分については、講義の最初にふれておきました。最蓮房に対しては、「生死一大事血脈抄」「草木成仏口決」「祈禱抄」等、ずいぶん重要な法門をしたため、与えられております。なかでもこの「諸法実相抄」は、もっとも肝要な法門をしたためた、とおおせです。そして、こうしてみると、あなたもずいぶん不思議な人であるとおおせです。末法御本仏である日蓮大聖人の身に当たっての法門、御本仏の御境界、実践をそのまましたためた御書をいただいている。きっと、地涌の菩薩の一員として、末法広宣流布に重要な使命を担っている人であろう、ということです。

「日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にもやあるらん」とは、御謙遜のお言葉です。この背後には、外用は「一名上行乃至唱導之師」であり、本地は久遠元初の自受用身如来であり、末法の御本仏であるとの御確信が込められております。

「南無妙法蓮華経と唱へて日本国の男女を・みちびかんとおもへばなり」——日本国とおおせでありますが、意は一閻浮提であり、未来永遠の衆生です。末法において南無妙法蓮華経によって、一切衆生を救わんとされた方は、日蓮大聖人しかおられない。ゆえに、大聖人が地涌の棟梁であり、末法の御本仏であられる。

「まことに宿縁のをふところ予が弟子となり給う」——かさねて宿縁の不思議を述べて、使命の自覚

をうながされております。

最蓮房に与えられた他の御書に、つぎのような一節があります。「只今の御文に自今以後は日比の邪師を捨て偏に正師と憑むとの仰せは不審に覚へ候」（御書全集一三四二ページ）――すなわち、最蓮房が日蓮大聖人にお手紙をさしあげて「これから以後は、これまでの邪師をすてて、ただひたすら日蓮大聖人を正師とたのんで、仏道修行に励んでいきます」と誓いの言葉を述べたのです。これに対して大聖人は「不審に覚へ候」――あなたは、おかしなことをいいますね、といわれている。

なぜ、このようにいうのかということについて、続いて述べられているのですが、要約すれば「あなたとは、もともと師弟だったではないか。いま初めての契りではない。偶然の巡りあいではない」と述べられているのです。

じつは、この「不審に覚へ候」ということに、重大な仏法上の意味があります。最蓮房の表現は、表面的、常識的に考えれば、当然すぎるほど当然なのです。しかし、大聖人は三世にわたる仏法の達観のうえから、深く掘り下げられて、仏法の師弟を論じられたのです。

私どもの立場においていえば、今世においてたまたま大聖人の仏法に巡りあえたと思うべきではないのです。もともと日蓮大聖人との師弟の絆によって結ばれた私たちなのです。私たち仏法兄弟もまた久遠よりの同志であり、兄弟でありました。それが、さまざまな姿、形をとりながら、この世に再び集いきたって、日蓮大聖人の末弟として広宣流布へと使命の道を歩んでいるのです。

さらにいえば、久遠は今にあり、今は久遠であります。ゆえに、現在に久遠の契りを結ぶわれら

は、永遠に仏法兄弟の道を歩んでいくことを自覚したい。さきの御文にも「三世各別あるべからず」とありましたごとく、現在の姿は久遠を映しだし、未来の私どもの姿を生命の鏡に浮かばせていることを確信します。

ゆえに、ともどもに尊敬しあい、学びあい、励ましあい、異体同心の輪を広げていこうではありませんか。

したがって、皆さん方も「まことに宿縁のをふところ」信心できたのです。それだけの力があり、それだけの責任があります。「この世で果たさん使命あり」です。

「此の文あひかまへて秘し給へ、日蓮が己証の法門等かきつけて候ぞ、とどめ畢んぬ」――「秘し給へ」とは、一つには、当時の人々には大聖人の仏法の真髄がわからない。いたずらに不審を起こさせてはならないとの御配慮です。またしっかりと生命に刻み、とどめなさい、ということであります。

「己証の法門」――大聖人の己心に悟った法門を書きつけた重書であることを、最後に述べられて、本抄を終わられております。

（昭和五十二年一月「聖教新聞」掲載）